
ピースが足りない

白い黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピースが足りない

【Nコード】

N1458Q

【作者名】

白い黒猫

【あらすじ】

自分が求める幸せな風景を作り出すには、ピースが足りない。

誰より愛する女性と結婚したものの自分では彼女を幸福に出来ず苦悩する賢治。自分が歩むべき人生に悩む薫。自分の人生に足りてない部分を埋めるものを模索する香織。

『欠け』を抱えた三人の出会いは何を生み出すのか？

R-15 となっていますが性的描写とか残虐描写はありません。

ただ、登場人物が抱える悩みが十五歳未満の方にはチョット、分かり辛いかもしれないという事で入れさせていただきました。

幸せの風景（前書き）

『欠けている』は15000字くらいの短編の続編にあたる物語です。読まなくても、『欠けている』でのエピソードは説明されますので大丈夫といったら大丈夫ですがそちらを先に読まれたほうが、香織と薫がどのように友情を作ったかが分かりより楽しめるかも？

幸せの風景

> i 1 6 7 1 2 — 1 6 0 3 <

「トンカチは……あつた！　ここね」

「次は長靴か……」

リビングにある妻の手作りのパッチワークのカバーの掛かったソファーに並んで座りながら二人は、一心にパズルのピースを探している。テーブルの上には半分程組み合わせられたジグソーパズルとそれを囲むようにマークのついたピースが散らばっている。テーブルの端には、湯気の上がったハーブティーが良い香りを放っている。

「長靴、見つけた！」

妻がピースを取り、左耳にかかった髪を掻き上げながら俺の方を見て嬉しそうに笑う。百五十センチチョットという小柄な体型と、大きい黒目がちな瞳に長い髪で華奢な見た目の為に、化粧をしてないと大学生どころか高校生にも間違えられそうな彼女は、こう見えても二十代後半である。

最近、俺と妻はジグソーパズルにハマっている。それは普通のジグソーパズルではなくジガソーパズルという名前の商品で、一つのセットで世界中いかなる人の顔も作り出せるというモノ。なんてそんな事が可能かという、このパズルのセットは元々単なるモニターのグラデーションで構成された、全てが同じ形のジグソーパズル。利用者は作りたい人物の画像のあるサイトにメールで送ると、直ぐにアイコンマークの並んだ回答表というものが送信されてくる。その回答表に従ってピースの後ろに描かれたアイコンマークを並べ

てはめ込んで引つ繰り返すと、そこに先程送った画像が現れるという訳だ。

勿論グラデーションのピースだけで組上がった物なので、詳細さには欠けるけど、モザイクチックに表現されたその顔にはなかなかの味わいがある。近くで見ると『なんだ？ コレ？』という感じだけど離れてみると確かに送った図柄がそこに上手い具合に浮かび上がってくるのだ。また絵でなく、ピースを裏返した状態が作るため、出来上がるまで、完成した絵が見えないという所がまた面白い。顔を寄せあつて携帯画面を覗きながら、一つの絵を作り上げるという作業が、また楽しい。俺と妻にとって、余計な話題をしなくて済むのもまた良いのかもしれない。

このパズルは、俺達のような。同じピースで幼なじみ、恋人、夫婦と様々な関係を築き上げてきている。

だけど、二人の人生とパズルは何度詰め直しても、彼女が幼い時から求め続けた風景を作り出す事が出来ない。ピースが明らかに足りないのだ。

ドラマ好きで、いつも楽しそうに物語を語っていた彼女が、いつからテレビを見なくなつた？ 何も言わないけど、病院に通わなくなつたのも何となく気付いていた。基礎体温も最近記録するのを止めている事も、ベッドで妻を抱き寄せる時彼女の身体が強張る事にも俺は何も言えなかつた。

妻も俺がそういった事を気にしながら何も言わず戸惑っているのも気がついて、俺に何も言わない。付き合いが長すぎる為に、互いの気持ち分かり過ぎるくらい良く分かるのが困つた所である。二人はお互いには楽しそうな笑顔を見せ合つて、二人でいる事が幸せなのだとアピールしあふ。馬鹿げた行為にも思えるけれど、俺は自分自身とこの妻との世界を守る為にそうするしか出来なかつた。

あれほど俺を幸せにし続けていた彼女の笑顔が、逆に苦しめる。

俺が欲しかったのはこんなに悲しみを秘めた笑みではない。

つい手を止めて妻を見つめている俺の視線に気付き、左耳を抑えるような仕草で妻がどうしたのという目で見上げてくる。

「いや。今度の図柄は、そういう顰^{しか}め面した香織でも、いいかなと思つて」

子供っぽいムツとした顔になる。年齢のわりに幼く見えるけれど、小さい頃から周囲に気を遣い、無為に生きてきた。一人っ子で我が儘に育ってきた俺とは違って、彼女は物事を達観して見ている大人びた子供だった。そんな彼女だから人に遠慮ばかりして、甘える事が実は下手だったりする。彼女が甘える事ができるのは、俺と彼女を育ててきた祖母くらいだろう。

「そしたら、その次はケンちゃんの寝顔にしちゃうよ」

妻は、どうだ！ といった表情で見上げてくる。最近は必要以上に甘えた子供っぽい顔で話すようになっていた。それは、彼女が甘えたいというよりも、俺がそうして欲しい事を察しているからだろ

う。

最近の俺達は、学生時代の時よりも、子供っぽく二人で巫山戯あつてゐる事が多い。そうする事で、俺達夫婦に欠けている物を必死で補おうとしていたからかもしれない。

先程から妻が頭部に手をやり、眉を顰める様子が気になる。

「ところで、頭痛いの？」

妻は、ビックリしたような顔で首をふる。そして少し困った顔をする。

「ううん？ ただね、今日なんか耳の調子が変わなの」

「え？ チョットみせて」

何で、そんな大切な事、真っ先にいつて来ないのか？ 彼女は祖母に心配させまいと生きていたこともあり、体調の異常といったものを隠そうとする。多分俺が彼女に感じている唯一の不満といったらこの事。彼女のこういう所が溜まらなく歯がゆい。俺は彼女を引き寄せ耳の奥覗いてみるが、見える範囲は何もオカシイところはないし、暗く深い耳の奥がどうなっているのかも見えるはずもない。

「なんか、違和感というか、耳に何かが詰まっているような感じと
いうのかな？」

「うーん、見える範囲では、何もオカシイ所ないけど、明日病院に行
った方がいいよ」

あまりにも心配そうにしている俺に、ゆっくりと身体を戻し、子供に
するように俺の頭を撫でながら笑う。

「でも、痛いとかいうのではないのよ。ホント大した事ないの」

「いや、明日になってもオカシイようだったら、絶対病院いくんだ
よ！ 大した事ないならないで原因が分かったらスッキリするだろ
？」

あまりにも真剣に心配する様子の俺が、そんなに面白かったのか
妻はクスクス笑い出す。なんだろう久しぶりに悲しみを秘め耐えた
笑みではなく、本当に嬉しそうな笑顔を向けてくれた事は嬉しかっ

たけれど、俺は顔を引き締め暢気な彼女を表情で諷める。

「分かりました！ 明日買い物のついでに隣町の大学病院いってくるね」

妻は俺を『だからそんな顔しないで！』と安心させるようにニッコリと笑う。

そういえば、妻が俺に笑いかける時って、こういうシチュエーションが多い。彼女自身が笑いたいからというより、俺を気遣うように笑う。初めて彼女が俺に笑ってくれた時もそうだった。

もう二十年ほど前の話だ。俺の両親と妻の祖母と彼女の五人で出かけた近所の花火大会。父からもらったお金を握って、幼かった香織の手を引き、二人で屋台のかき氷を買いにいった時だった。チョット手を離れた瞬間、高校生くらいの男子生徒にぶつけられ彼女は転んでしまう。膝を激しくすりむき、そこから流れる血が流れているのを見て、俺はパニックになる。彼女は泣くこともなく、ただ無関心な様子で膝から流れる血をぼんやりと眺めている。だけど『大丈夫？ 痛くない？』とひたすら繰り返す俺に次第に戸惑ったような表情を見せた。そして、おずおずと俺の頭に手をやり、ぎこちなく笑った。人形のように表情をまったく出さなかった彼女が俺に見せてくれた、初めての人間らしい表情がそれだった。

幼き日の風景

「ケンちゃん、この子私の孫で香織っていうの。今度から一緒に暮らす事になったので、仲良くしてあげてね」

鬱陶しいくらい雨が降りしきる、六月。小学校からマンションに帰ってきた時、自分の家の隣に久しぶりに電気が灯っているのが付く。大好きなお隣の高梨さんが戻ってきた事知り、喜び勇んで訪ねたら、見知らぬ小さい女の子がその部屋にいた。真っ直ぐで長い髪で黒目がちの瞳が印象的で人形のように可愛い女の子。青いワンピースを着て腕を怪我しているのか三角巾で右腕を吊っていた。そしてボンヤリと外を眺めている。部屋にいきなり入ってきた俺の方をしばらく眺めていたけど、興味なさげに視線を窓の方に戻してしまった。

高梨さんは旦那様と死別したとかで隣で一人暮らししていた女性で、俺の母親と仲良く、共稼ぎしていた母が家族以上に彼女を頼っていた。俺は高梨さんによく預けていたりしていた事もあり、俺にとって三人目の祖母とも言える存在だった。

自分の家同様勝手知ったる、高梨さんの家。そんな自分のテリトリーに突然入ってきた存在に戸惑ったものの、大好きな高梨さんのお願いでもあったし、しかも一人っ子の俺に妹が出来た感じもしてチョット嬉しかった。

窓のから外を眺めるその子の隣にすぐ近づき、俺は窓から見える建物を次々指さし、その子にこの街の事を教えてあげる事にする。その子は俺の話を聞いているのか聞いてないのか分からない感じ、俺の言葉に反応する事もなく、ただ窓にぶつかり流れていく雨の様子を虚ろな瞳で見つめていた。

「ケンちゃん、この子、チョット照れ屋さんで、引っ込み思案なの」

困っている俺に高梨さんは優しく笑いかけながら、香織という女の子の頭を優しくなでる。その子は高梨さんのそういった動作にも何の反応も示さない。殆ど動くこともしない、言葉を話すこともしない、本当に人形のようなのだ。

子供ながらに、この子の様子は、照れ屋さんとか引つ込み思案とかいうレベルではないのは、何となく分かった。

俺は釈然としない気持ちのまま、家に帰ることになる。

晩ご飯の時に、香織という女の子の様子を父と母に話すと、二人とも何故か悲しそうに顔を歪める。

「香織ちゃんね、お父さんとお母さんを車の事故で亡くしてしまったばかりなの。心が怪我しちゃっているの。だからお前は、香織ちゃんの心が早く元気になるように、仲良くしてあげてね。心の怪我はね、人の優しさが最高のお薬なのだから」

母のその言葉は、小学校の俺には衝撃だった。生まれて初めて人の死というものが、どれほど大変で遺された人の心に傷を残す事なんだと実感した瞬間でもあった。俺より三つ歳も小さいのに、あの女の子は大切な両親を失ってしまったというのだ。

もし、自分が彼女の立場だったらどうするのだろうか？ ずっとずっと泣き続けるのだろうか？ 想像もつかない。

最初はなんとも幼い、ヒロイズムだったのかもしれない。お伽噺の王子様が少年漫画のヒーローにもなった気分で、自分こそが彼女を救うんだと、学校から帰ると、すぐに隣に行き彼女の元に通う日々が始まる。

今考えてみると、現実を拒絶し自分の世界に閉じこもってしまっただ彼女にとって、脳天気に近いってくる俺なんて迷惑意外の何者でもなかったと思う。でも、少しずつ表情を取り戻して可愛くなっていく彼女に、俺は惹かれていった。最初は偽善で始まった彼女との

交流だが、俺は彼女と一緒に遊ぶ事が嬉しくて夢中になる。高梨さんも、俺の両親もその様子が面白かったようで、いつも二人でいる俺達を三人は微笑ましそうに見守ってくれた。

高梨さんは、香織が表情を取り戻していったのは俺のお陰だと言う。俺は高梨さんの愛情溢れる生活が彼女の心を癒していたのだと、今はよく分かる。俺が出来たことは側にいてあげた事だけだ。そして彼女を見続けていただけ。高梨さんの愛情に満ちた暖かさが彼女の心を癒していき、小学校入学するまでには、ぎこちないながらも人との対話出来るくらいまでは回復していった。とはいえ、大切な人を簡単に失ってしまったという過去の為、子供にしては執着心といったものが殆どなく、可愛い容姿のわりに地味で温和しい学校生活を送っていたようだ。友達というものも、積極的に作ることもなく、俺以外に数年にわたって親しくしている友人というのをあまり見た事がない。

そんな彼女が、俺が両親と話をしている様子や、公園で楽しそうに遊ぶ親子を羨ましそうに眺めているのを、俺は気付いていた。その表情を見て、俺も切なくなるけれど何をしてあげられるわけもなく、ただそんな彼女を見つめていただけだ。

俺の視線の中で、幼かった彼女はどんどん成長し、中学生になり、高校生になり、綺麗になっていく。俺が高校になったとき、香織に告白する。拙いながらもそれぞれの家族にも暖かく見守られ順調に交際はスタートした。

先に社会人となり、自分にある程度の経済力がついてきたことを自覚できるようになった段階で俺は一つの決断をする。彼女をディズニーランドに誘い、そこで楽しそうに家族でリゾートを楽しむ親子の様子を眺めながら、香織にプロポーズをした。

「二人で、暖かくて楽しい『家族』を作ろう」

香織は驚いた顔をしたが、嬉しそうに頷いた。俺なら彼女がかつて失い、心から求めている物を彼女に与えられると思っていた。香織を幸せに出来るのは俺だけだという自負もあった。

俺は感極まり泣いている彼女を抱きしめながら、『香織を絶対幸せにする』と心に誓う。

どこか違和感のある風景

弁護士の仕事というのは、ドラマにあるように法律熟知した正義と弱いモノの味方という格好良い仕事ではない。法律は穴だらけだし、正義なんて立場によってバラバラであってないようなこの世の中において、俺達弁護士の仕事は正義でも弱き人でもなく、守るのは顧客の利益。顧客の悩みに対して、カウンセリングのように話しを聞いている時間や、資料を集め書類を作成している時間の方が法廷にいる時間より長い。いるのは熱い正義感ではなく、幅広い知識に裏付けされた冷静な判断力。

俺は午前中に一件顧客と打ち合わせをすまし、裁判所に資料を提出して、国立図書館で資料を集め事務所に戻ってきたら、十四時を超えていた。

香織の作った弁当を広げながら、携帯のメールをチェックすると香織から一件入っていた。

俺の仕事の邪魔はしたくないという想いから、彼女の方からメールを出す事は殆どない。このメールも、出かけに説得し病院にいった香織の、診察結果の報告だろう。逃げずに病院には行ったみたいではあったのだが、こんなに返事が遅くなった事に一抹の不安を感じる。

『お仕事、お疲れさまです。突発性難聴という診断を受けました。なんか一週間程入院しなきゃならないみたいですが、あまりにも急な話だったので、チョット保留にしました』

香織からのメールの内容に、俺は思わず固まるが、我にかえり、即座に通話ボタンを押す。

「香織？　大丈夫か？　入院ってそんな、保留にして良い問題か？」

「心配しないで、点滴治療を一週間行わないとダメな為に、入院の必要があるらしいの。でもね、急にそんな事言われても、ケンちゃんにも迷惑かけるし家の事もあるし何の準備もしてないし……」

おずおずと言い訳してくる妻に、俺は思わず怒鳴ってしまう。

「あんな、身体が一番大事だろ！　俺の事や家の事なんて二の次でいいんだよ」

『でも』と、入院することに尻込みしている妻を叱り、明日午前中、予約してちゃんと治療を続けるように指示を出す。

「俺も一緒に行ってやるから」

「そんな、一人でも大丈夫よ、忙しいのに」

俺の事よりも、自分の事を気にしなさいと妻に言い電話を切る。
隣で同僚の佐伯が心配そうに俺の顔を見ていた。

「奥さん、どうかされたんですか？」

俺は、佐伯に状況を説明する。佐伯はストレートで司法試験を突破した俺とは異なり四浪していることで、この事務所では俺の後輩となっている。年下の俺の指示を受けて仕事するのは嫌じゃないのかとも思うが、陽気で穏やかなこの男にはそういった下らない嫉妬というのは似合わないのかもしれない。俺の事を気遣うように声をかけてくる。

「突発性難聴なんて大変じゃないですか、早めに治療しにやきゃダメですよ！ 俺の友達が昔やって、治療なんてする暇ないなんて言っていたら、そのまま聴力固まってしまっんですよね。なんかすぐに治療するのが完治のさせる何よりもの方法らしいですから。あつ仕事の事は俺達でちゃんとフォローしますから奥さんに付いてやってください」

佐伯は軋憂の表情を浮かべ、コチラはお願いする前に申し出てくれた。俺はそんな佐伯に感謝しつつ、上司にも事情を説明しスケジュールを調整する。

一息つき、パソコンで『突発性難聴』について調べてみる。

原因不明となっているが、一般的に有力とされている説の一つにストレスが入っているのに激しい動揺を覚える。香織は俺にはいつも笑っているけれど、悲しみ苛立ちといった感情を必死で抑え、限界に近づいてきていたのは分かっていた。俺はそんな彼女に何も出来ず、相変わらず見つめ続けていただけ。自分の無力さに嫌気がさし、大きくため息をつく。

水曜日、仕事を午前中に半休した俺を香織は、酷く申し訳ながつた。しかし香織を通してではなく、直接医者とも話したかった。医者の話だと、香織は突発性難聴の症状として多く起きやすいめまいといったものもないものの、難聴を起こしている音程の範囲は軽度とは言いがたい事があるので錠剤による治療でなく点滴による治療を最良としたという事らしい。幸いな事に発症してすぐに病院にかかったこともあり、治療率は高いらしいという事にチョットホッとする。

隣で香織は、憂鬱そうにため息をつく。俺はそんな香織の肩に優しく手を沿える、そんな顔することないからと安心させるように笑いかける。

「お婆ちゃんには、心配かけたくないから秘密にしていってね」

チラリとコチラを見て、香織は俺にそつと囁いてくる。入院中心細いであるう彼女に、高梨さんが駆けつけてくれたなら少しは彼女心強いだろうなとは思うものの、高梨さんに伝わるということは、俺の両親にも筒抜け、結婚して五年目ということで、『新婚気分楽しみたいのは分かるけど、そろそろ子供は作ったほうが良いわよ!』と無邪気に孫を求めてくる俺の両親に今の彼女を対面させるのも、チョット危険だとも思った。俺同様、両親も香織との付き合いが長い。その分、ストレートで遠慮もないのが困ったところである。俺が、必死で話題を反らしたら反らしたで『アンタが、仕事ばかりしているから! ちゃんと家に帰っているわよね? 高梨さんに早く曾孫を見せて上げたいと貴方も思うでしょ?』俺に対してはさらに遠慮なく、まくし立てられる。そういう両親には俺も頭が痛い。

「あつ! 今耳鼻科の病室が満床でして、別の科の病室でもかまいませんか?」

俺は耳鼻科の入院患者がなんで、そこまで患者が多い? とも思っただけど、突発性難聴の場合早く治療をする事の方が重要なので、その言葉に頷く。

この時に、入院する病棟までちゃんと何故一緒に行つて確認するまでしなかったのかと、後で後悔する。

その為に香織が苦悩の三日間を過ごす事になるなんて知りもしなかった。

俺は午後の予定が迫っていることもあり、入院する病室へ看護婦さんに案内され向かう香織を見送ってから病院を後にした。

午後からの仕事だったこともあり、その日の帰宅はかなり遅めに

なり、家にたどり着いたのは日付が変わるか変わらないかというくらい時間だった。

誰もいない家に帰るのはなんとも侘びしい。家に香織がいるのといないのでこうも風景は変わってしまうものなのだろうか？ 手作りのキルトが散りばめられた綺麗に片付けられた室内は変わらない筈なのに、風景から彩度が落ちてしまったようで、暗く冷たく感じる。

『今家に帰ったよ。お休み。ゆっくり療養するんだよ』

俺はもう寝ているとは思っけれど、メールで帰るコールを送る。寂しさもあり、どこか香織と繋がっていたい気分だった。

驚いた事に、すぐにメールが帰ってくる。

『お帰りなさい、遅くまでお疲れさま！ 一回目の点滴無事終わりました。点滴後も血圧も変化なしで、取りあえずは順調みたいです。明日朝コーンフ레이크をちゃんと食べてね。あと冷蔵庫のヨーグルトとバナナ入っていますから！ それも食べてね』

病院にいてまで、俺の朝食の心配をしてくる香織に、俺の心は暖かくなる。

金曜日に大きな裁判が入っていた事もあり、なんとも慌ただしい忙しい週だった。メールで香織とやり取りはいつもより多めになっているものの、病院に行く暇もなく俺は仕事に集中していた。

『病院って何か落ち着かないね、早くお家に帰りたい』

金曜日に珍しく甘えた言葉をメールしてくる香織。俺は読んで思わずにやけてしまい。

『俺も寂しいよ。明日は休みだから朝一で会いに行くよ、香織の好きなお菓子沢山もってね!』

速攻でメールを返す。そのメールを打つのを、隣で見ていた佐伯が、ニヤニヤとする。

「いつもクールな鈴木さんですが、奥さんにはメロメロなんですね
いいですね! 結婚五年でまだそんなにラブラブってなかなかいい
ませんよね」

俺は、子供っぽく目を爛々とさせていう佐伯に、何も言えなかった。自分の顔見えてないけど、顔が赤くなっているのを感じた。冷静沈着というイメージで過ごしているだけに、同僚とはいえないこういう部分を見せてしまうのは恥ずかしい物がある。そして、俺は香織がどういう心境でこのメールを出してきたかも気付いていないでいた。

それどころか、土曜日に香織を見舞ったときには、妻を苦しめていた問題は、俺が動くまでもなく解決していた事にもショックを受けることになる。

そして俺は今、妻を守り救ったとする鈴木薫という人物を前に、戸惑っている。

鈴木薫も緊張した面持ちで、切れ上がった目を挑むように俺の方を見上げている。

涼しげな目元、スッキリした鼻と口で整った顔立ちをしているともいえるその人物。クセのないミディアムヘアのこの人物。雰囲気的にはバスケットかバレーとかやってきた女性のように見える。残念なのは彼女の右目を覆うように出来た青痣がその顔を無残なものにしている。事故かなにかあって、この病院にいるのだろう。車椅子

子に乗って片足をギブスで固めている。

ボーイッシュなその顔立ちに反して、明るいピンクのフリルがヒラヒラした乙女チックなＴシャツに身に付け、それがお世辞にも似合っているとはいえない。香織はニコニコと親しみをもった瞳で鈴木薫を見つめている。そして自慢げに『友達の薫さん』と紹介する。なんだろう不思議な既視感と違和感を覚えつつ、俺は、鈴木薫に挨拶をする。

「香織の夫、賢治です。妻が色々とお世話になったようで」お

「鈴木薫です。奥さんと仲良くさせて頂いています」

鈴木薫は、女性にしては低い声で挨拶を返してきた。

夫婦の形

入院生活というのは、時間に追われ忙しい生活をしている人から見たら、優雅にみえるかもしれない。

上げ膳下げ膳の貴族のような優雅な世界。しかしプライバシーといったモノがない。見舞いに来た仕事仲間や、私の弁護士や、元彼の弁護士や刑事などの会話で、この病棟にいる人は皆、私がこんな身体で病院に運び込まれた事情が分かっている。困った事に、私のいる病棟が包帯で覆われた箇所意外はすこぶる元気な、退屈しきった人達ばかり。彼らにとっては恰好な話の種で、良い退屈しのぎだったかもしれない。

最低男に引つ掛かり、全身打撲に右足複雑骨折で入院生活を余儀なくされた私。一週間を過ぎ、顔を青色を越えて黄色に変わる所まででできて凄まじい状況となっている右目の回りの痣。腫れは惹いたもののまだ傷があるために化粧で隠すこともできていない。病院で友達となった鈴木香織が、午前中にコッソリ病院を抜け出して隣にあるスーパーで買ってきてくれた深めのニット帽子で今、何とか上手く隠している。

こんな状況の私を、香織は普通に受け入れ友情を示してくれる。

香織とお茶をする為にリハビリを終えレストランに行くと、今日は彼女は一人ではなかった。

体格も良く二枚目の男性と一緒に楽しそうに話している。前にもチラリと見たことがある、彼女の旦那様。今日は土曜日だったことを改めて思い出す。邪魔したら悪いとコッソリ去ろうとしたが、香織がいち早く私の存在に気が付き、嬉しそうに手を振ってくる。そして一緒にいる男性に、嬉しそうに何やら話している。『入院中にお友達になった鈴木薫さんよ』と言う感じで私の説明をしている

のだろう。その男性はコチラに紳士な笑顔をむけ、私に近づいてスマートに挨拶をし車椅子を動かすのを手伝ってくれる。こういう一連の動作が自然に格好良く出来るというも凄いなと思う。ジェントルマンという生物が、日本においても生息していたという事実に純粹に感動する。

そして私は、香織とその夫賢治と向かい合うように座る。ニコニコと笑う香織と、笑顔を浮かべながら私を怪訝そうに見ている夫賢治。

私はあえて、その夫の視線を気付いてないようして、会話を続けていく。

「鈴木薫と鈴木香織、読みが一字違いだけなんて面白いわよね」

香織にとつては、夫がいる事が嬉しくて堪らないのだろう。いつも以上にはしゃいでいて楽しそうだ。

それに昨日から、彼女を悩ませていた病室を移動になった事で、久しぶりにゆっくり睡眠もできたのだろう。顔色もよくなった。彼女は不妊治療で苦しんできたのに関わらず、産婦人科の近くの病室に入れられことで、精神的に追い詰められていた。それを私は見てられず、病院に訴えたことで昨晚から病室が私のいる外科に移動になり精神的に楽になったようだ。

「でも、まあ『鈴木』の名前は、一般的だからね。俺は一字違いどころか同姓同名に結構会うことがあるよ」

「そうですね、私も昔同じクラスに、漢字は違うけど、同じ名前の女の子いましたから」

他愛ない会話を装いながら、賢治が常に私の事を警戒し探るよう

な目で見てくる。

そりゃそうだろう、大切な奥様がお友達と紹介してきたのが、女装した男だったのだから。

点滴の残りが少なくなってきたことで、香織が、点滴を外すために一旦病室に戻るようになった。賢治も一緒に付きそおうとしたが、すぐ戻るからと香織は一人で病室に戻ってしまった。点滴を取るだけではなく、その後脈拍や血圧をはかったり以外に時間かかる。落ち着かない病室で手持ちぶささの時間を夫に過ごさせるのも申し訳ないと思ったのだろう。そして取り残される、私と賢治。気まずい。なんだろう間男であるかのような居心悪さは。

「あの、」

「この度は、本当に有難うございました。鈴木さんには感謝しています」

私は、一度ちゃんと説明する必要があると口をあげたが、同時に相手も言葉を発してきた。

明かに相手の方が文章になっていたので、譲ることにする。

「いえ、私は奥様が倒れられた時に。偶々居合わせただけです」

「病室移動の事も感謝しています。貴方が働きかけてくれたと病院の方から聞きました。ところで……」

その最期の接続助詞から、『本題が来た！』と感じ私は先に言いたい事を言うことにする。

「あの、ご心配なく、私は女性に恋愛感情といったものは抱けませ

んから」

今まで、他人に自分の恋愛感とかを言ったこともなかっただけに、コレでも私としては、かなり勇気をもって発した言葉だった。

しかし、驚いたようにポカンと私を見て、笑い出した。

「失礼、それは理解しています。私は職業柄人の感情や本心を読むのは得意だ。妻と貴女が純粹に友情を築いているのは分かっています。それに貴方から男性といった要素はまったく感じない。実は最初女性だと思いましたし」

女性と見て貰えたことは嬉しかったが、ここまでハッキリと『お前なんて俺の敵となる相手じゃない』と言われた事には、微妙な気持ちになる。確かに世間的にはオカマのホステスやっている私と、体格もよく二枚目でエリートな感じのこの男とは勝負にはならないだろう。勝負するつもりもないけど。

「でも、あまり私を良く思っではいませんよね」

相手は困ったように笑う。そして首をふる。こういう顔も行動も、TVでドラマ等に出てくる二枚目俳優のように決まっている。

「いえ、そう思わせた事は謝ります。妻を助けてくれた事も、妻と仲良くしてくれている事に感謝しています。——ただつまらない嫉妬です。妻を助けたのが自分でなかったのですから」

頭も良いようだ。さりげなく自分の弱さをさらし、相手を信頼させる言葉を発してくる。でも彼が言ったのは嘘ではないが、私の言葉の返事にはなってない。

彼は私を警戒している。あいにく、私はこの男のほど自分の感情

を隠すのが上手くない。そんな納得していない感情をしつかり表に出してしまったのだろう。賢治は苦笑する。

「本当ですよ、貴方にチョット嫉妬している。貴女も気付いているでしょうが、香織は人見知りが激しい。俺だつて彼女と普通に話せるようになるのに一年以上の時間かかったのに、貴女はほんの数日で彼女の信頼を手にいれた。それが友情でも戸惑っている。あと君の事、何処かで見た気もしてね。それを考えていました」

「奥さんにベタ惚れというわけですか。そんなノロケ私には痛いだけなんです。後宝塚の男役やっていたような女優に似ているとかいったら、怒りますよ」

悪い人ではないのだろう。そして、妻のここ数日の様子を聞いてくる。

二人の出会い、このレストランで仲良くなった事、入院生活の中でギリギリまで追い詰められた段階で、隣にいた自分に胸の内を漏らしたという事を。

時には顔を歪め真剣に聞いている賢治の表情を見ていて、この男は本当に妻を愛していて、守ろうとしているのを感じる。この人と一緒ならば、香織も大丈夫だろうと安心するのと同時に、自分は決して香織のように男性に愛されることなんてないだろうというのを分かっているだけに、嫉妬で心が痛む。私が彼女のように、男性から愛されるというのは難しい事だろう。

そんな事を話していると、香織が戻ってくる。点滴スタンドから解放されて身軽そうだ。

「二人で何、話していたの？」

ニコニコと笑いかけてくる。ずっと、夫の隣に座り首を傾げるよ

うに顔を見あげてくる。その仕草が可愛い。

「いろいろ、あと薫さんが、誰かに似ているよねといった話とか、香織も、誰かに似ていると思わない？」

香織は首を傾げ私の顔をしげしげと見つめる。つぶらな瞳でこんなに真っ直ぐ見つめられると、私でもドキドキしてしまう。こんな可愛い奥さんをもつと、男にしてみたら色んな者に嫉妬してしまうのも仕方が無い気もする。

「うーん 天海祐希とか？」

美人女優に例えられるのは嬉しいけど、やはり、ああいうゴツイ印象なのね、私は。私はため息をつく。そんな私を見て、賢治は笑っている。私はジロつと賢治を睨み付ける。肩をすくめ『失礼』と賢治は対して申し訳なくもなさそうに謝った。

何でだろう、紳士的で一見普通に接してくれているこの男。でもこの男の視線は酷く居心地が悪かった。

今まで散々自分に向けられてきた、嫌悪感とか、嘲りとか、奇異とかの拒絶の視線ではない。彼は軽い嫉妬と言ったが、それだけがこの心地わるさの原因なのだろうか？ 分からない。私はあえて気が付かないフリをすることにする。

友情の形

一見、穏やかだけどどこか嫌な緊張感に包まれたお茶会は、病院の夕飯の時間の到来によってお開きになる。賢治は紳士な態度は崩さず、妻を病室に送るついでに、私の車椅子を病室まで押してくれた。

食事も終わり、歯を磨くために洗面所へ向かっていると香織がそつと近づいてきて車椅子を押し移動を手伝ってくれた。そして少しそつと顔を私に近づけてくる。

「夫の事なのだけど職業柄、人を威圧させる所あるから、薫ちゃんに不快な思いさせてしまったみたいで、ゴメンね」

私を氣遣うようにおずおずとした口調でそんな事を言ってきた。

流石夫婦というべきだろうか？ 夫が私に対してなんとも複雑な感情を抱いている事に、香織も気付いていたようだ。そして私自身も、かなり上手く隠していたものの、賢治に対しての惑いからくる苦手意識といった感情にも香織が気付いていたことに驚かされた。

「別に、何も、不快な思いしてないけど。賢治さん何か言っていたの？」

私はあえて、惚けてそんな返事を返す。そんな私を香織はジッと見つめてくる。

「いや、いつもの癖で薫ちゃんに、踏み込んだ話までしてきて、傷つけたのではないかと思って。薫ちゃんチョット主人に対して退いていたところあったように思ってた」

どうしたものかと、私は考える。香織は私が始めから性同一性障害であることを気付いたうえで女性と扱って付き合ってきたくれている。一見浮世離れしていて、他人の感情に無頓着に見えて、実は人よりも敏感に他人の感情を察してくる女性だと、だんだん分かってきた。同時に、私が何故香織という存在をすんなり受け入れてしまったのか、その理由も気付く。私はあえてニツコリ笑う。

「いやいや、私、最近色々あって、ちょっと男性不信状態で。だから男性と話すのが苦手になっっている所があるのかも」

私はまったくの嘘ではないけど、真実でもない、ごまかしの言葉を返してしまう。ごまかしだらけの自分が嫌で、女性として生きていく道を選んだ筈なのに、私は相変わらずごまかしの言葉を口に出している。得意の作り笑いも変わっていない。

そんな私の内心を理解しているのか、理解していないのかまでは分からないが、香織は困ったような笑顔を浮かべ私を見つめる。そして何故か幼い子供にするかのように、私の頭を優しく撫で、そして去って『じゃ、お休み。良い夢をみてね』といった言葉を言い去っていった。

部屋に戻るとスマートフォンが一通のメールを受信していた。その送信者の名前を見て、私は息をのむ。

私が男性の自分と共に捨て去ってしまった友の名前がそこにあった。嫌、捨てきれず未だに心のどこかで縋っている存在の一人。そしてさつき香織の目を見て、頭の中に鮮やかに蘇った人物だった。どこか似ているのだ、この子と香織が。顔とかしゃべり方とか、全然違うけど、人との距離のとり方や接し方が。

親と揉めて家を飛び出した夜、私は何故か親友ではなく、親友の彼女であるその子に支離滅裂なメールを出してしまった。私は、す

ぐに心配して返ってきたその子からのメールにも、親友からの電話にも私は応えることができなかった。二人に状況を説明して、親のように拒絶される事が何よりも怖かったから。

一方的に感情的なメールを出して、そのまま無反応という最低な事をしてしまったのに関わらず、二人は私にメールを出し続けてくれた。そんなメールに申し訳なさを感じながら、まだ二人が自分を気に掛けてくれている事実には安堵を覚えていた。

一人での生活が落ちてきた所で、ようやく親友に『心配かけてゴメン。もう大丈夫。元気にしているよ』と簡単なメールを返す。それ以降も、二人からメールは届く。ストレートに気遣いの感情を表に出し『飲みに行かないか？』『久しぶりに会わないか？』といった内容のメールで接触を求め手くる親友とは異なり、彼女は、『こんな不思議な白い雲をみました』とか、『今日観た映画、薰さんも好きそうな感じです』とか、『こんな面白い看板がありました！』とか、写真と共に他愛ない内容のメール。逆にそんな内容のメールの方が、私には反応しやすかった。なので、三通に一通は彼女の方のメールに返事を返す。あの親友と彼女が別れるなんて事も考えられないので、私はそんな細々とした頼りない繋がりで二人に縋る。

そして、恋人に裏切られ再び絶望の中で、また感情的な内容のメールをその子に出してしまった。『今病院ですか？ 何か必要な物とかあったら持っていくますよ？』どここの病院ですか？』といった心配したメールが何回か届くが、私は再び沈黙を続けていた。二人に逢いたいけど、こんな姿ますます見せられない。

メールを開くと、地平線いっぱいには咲き広がる向日葵の風景の写真が目飛び込む。

『花束なんて小っちゃいモノ貰っても仕方が無いですよ？』なので大地いっぱい向日葵どうぞ！』彼女の言葉が聞こえてくるようなメール私は泣きたいような、笑いたいような複雑な気持ちになる。

『綺麗な花ありがと！ 元気出たよ。でもつきり君の事だから

百合の花束の写真でもくれるのかと思った。』

つい、メールを返してしまう。それに心配をかけたままなのも気が引けていたので。

『よかった！ 百合は綺麗だけど気取っている感じで好きではなかったりします。それに月は太陽の力で満月になるでしょ？ だから太陽の花が好きなんです。』

すぐに返ってくるそのメールの内容に、思わず笑ってしまう。あんなに脆くて弱いと思っていたこの子に、逆に支えられる日があるなんて想いもしなかった。いや、前からこの子にとってくる微妙な距離感に私は救われてきた。

また親友とこの子と私の三人で、顔合わせて笑い合える日ってくるのだろうか？ 私は暫く、その向日葵の写真をジッと眺め続けた。いた。

ふと思いついて、向日葵の花言葉をネットで調べると『光輝』『愛慕』といったものに加え『私の目はあなたを見つめている』『いつもそばにいるよ』とあった。そこまでの意味を込めて送ってくれた画像なのかは分からないけれど、そういった想いを私はその画像に感じた。

一つの愛の形

懐かしい夢を見た。楽しい高校時代の風景、大人でもなく、かといつてまるつきり無邪気なだけの子供でもなく、男も女も同じ紺色の制服で染め上げて、全てが曖昧で未熟なその状態に甘える事が許されていたあの時代の。

そこで私は笑っていた、セーラー服に身を包み、じゃれるように小さいあの子を抱きしめる。そんな私達を傷ついたような顔でみていた友人も、笑ってみている。夢の中で、私と彼女がじゃれあっている、女同士なら嫉妬なんてする必要もない状況なんだろう。

久しぶりに楽しい気持ちで目を覚まし、汚れた病院の天井が目には入りなんとも言えないほど切ない気持ちになる。

今日は、日曜日という事で、リハビリも休み。午前中はカーテンでパーソナルスペースを保持し、本でも読んで過ごそうかと思っていたら、意外な見舞い客が訪れてきた。

昨日出会ったばかりの人物、鈴木賢治である。

大きな百合の花束を持って颯爽と現れて、スマートにそれを私に手渡す。こういった一連の動作をキザに見せず自然にやって見せるところは流石である。元彼もそれなりに二枚目であったが、この男を見ていると分かる、役者がぜんぜん違う。いや、あんな自己中心的で傲慢な最低男と比較するほうが間違えているか。知的で冷静、自分が何を求めている、自分に何を求められているかも理解し、その両方を泰然と叶えてみせる事が出来る、大人の男である。

私がG.I.Dでなかったら、多分理想として、こういう男になることを目指していたと思う。

「もしかして、百合あまり好きではなかったですか？」

戸惑いながら、百合の花束を見つめている私に、苦笑しながら賢治は聞いてくる。

「いえ、百合は大好きな花です。嬉しいです。ありがとうございます」

私は素直にお礼を言う。

「ただ、慣れてなくてこういうの。すいません、可愛く『有難う』ってはいやいで喜ぶ事が性格的になんか出来なくて。本当に嬉しいです」

私は素晴らしい芳香を放つその花束を優しく抱きしめる。

賢治は、フツと笑う。その笑いは嘲りの意味ではなく、好意的なもので、穏やかで優しい色を帯びていた。思わずハツとするほど魅力的な笑みに思わず見惚れてしまう。

「その嬉しそうな表情が見られて、良かった。百合を選んだ甲斐があった。それにその花は貴方によく似合っている」

こういう言葉をサラリと言ってくるなんて、なんて女殺しなのだろうか。私は苦笑する。

「お世辞でも嬉しいですよ。ところで今日はどういう理由でこの部屋に？」

賢治は肩をすくめ、『お世辞ではないですがね』といった事を言ってくる。

「妻の事でちゃんとお礼をしたかったですよ」

私はニツコリとした笑みで、先に続く言葉を待つ。お礼は昨日のうちにされている。でも態々妻の見舞いの花束もって前に私の元を訪ねてきたという事は、何か直接話したいことがあったからだろう。

「ところで、怪我の方は如何ですか？」

「腫れも退いてきて、来週には退院出来そうです」

松葉杖も使えるようになってきたし、医者曰く経過は順調ならしい。あとは通院によりリハビリをしていくことになりそうだ。私もいつまでもこんな所でウダウダしているわけにもいかない。生活費も稼がないといけない。

「それは良かった。あっ私、こういうことやっているの、交通事故の処理とかで困った事あったら相談のりますから」

そういつて、賢治はポケットからケースを出し名刺を差し出してくる。見ると、弁護士となっている。

「ありがとうございます。まあ私の場合交通事故でなく傷害事件なのですけどね。知人から弁護士紹介してもらって今色々やってもらっている所です。でも、弁護士ってこうやって営業活動しなきゃならないって、結構大変ですね」

しまった、素直に思った事を口にしてしまったが、かなり失礼な事を言ったような気がする。賢治は苦笑し、イヤイヤと首を振る。

「なんか下手な接し方すると、私は残念な人に想われそうだ。貴方

は頭良い人だから、あまり遠回しな形で話しをするのは止め、これからは単刀直入にお話をする事にします。私はここに来たのは、貴方の怪我の理由がチョット気になったからです」

私はその言葉の意味が分からず、怪訝な顔で見上げてしまう。

「貴方が交通事故で怪我されたのとはかりに思ったので、一言お願いに来たのですが、その必要はなかったようです」

何が言いたいのだろう？　良く分からず私は首を傾げてしまう。

「交通事故だと何か問題があったのですか？」

賢治は、やや悩んだような顔をしたが、小さく溜息をつき口を開く。

「妻は、過去に交通事故を経験してしまして、貴方がそのつもりはなくても、話した事が彼女の精神状態にいらぬ刺激を与えることがあるのではと、懸念していた訳です」

なるほど彼は、私が交通事故でこうなつたと勘違いしていて心配していたというわけか。もしかしてその交通事故がきっかけで二人は出会ったのだろうか？

「事情は分かりました。言って下さって助かります。不用意な事で香織さんを傷つけるのは私も嫌ですから」

賢治は『ありがとう』と言いながら穏やかに笑った。彼なりに、脆いところをもった香織を守ろうと必死なのだ。それだけ彼女を愛しているのだろう。なんて頼もしいナイトを香織は持っているのだ

ろうか？　こうして自分だけのナイトをもつ、本当に女の子らしい生き方だ。愛されて、守られる。私にはやりたくても出来ない生き方、この先治療を進め、手術して身体を変え、戸籍も変える事ができたとしても、完璧に女になれるわけではない。だから本当に女の子らしい人生というのは私にはあり得ない。

「ところで、傷害事件って、誰に暴行をうけたのですか？」

「三階から突き落とされたんですよ。恋人だった人に」

私があえて笑顔でいった言葉に、賢治は眉を顰める。

「酷いな、それは。逆によくそれで済みましたね。相手は捕まりました？」

私は頷く。そう今相手は拘留中だ。そして弁護士を通して私に示談を申し入れ、なんとしても不起訴に持ち込もうとしている。単なる痴話げんかで済ませたいのが本音だろう。

「しかし、まだ拘留されたままというと、かなり警察が問題を重くおいているということですね。第三者行為災害届はもう出されていますよね？　相手は損害賠償責任をちゃんと負えるような人物ですか？」

私のかいつまんだ経緯を賢治は頷きながら聞き、そういった言葉を返してくる。

なるほど、こういった所なのね、香織が言っていた突っ込んだ話をしてくるというのは。しかし逆に仕事モードに入っているほうが、不思議と話しやすく感じた。この男とは、これくらいの距離感が気楽なのだろう。

「相手はそれなりの会社に勤めていた人なので、私の治療代くらいは払える能力はありますので。今互いに、弁護士を通じて、損害賠償について争っている所です」

「なるほど、目撃者なしの密室で起こったことですよ？　そこが辛いな、相手は出来る限り罪を軽くしてくるために、貴方に不利な事を言ってこようとするはずだ。あなたが被害者という事を出来る限り有利に働かせて賢く上手く動くべきですね」

「幸いな事に目撃者もいて、何故か私に有利な証言をしてくれているので」

目撃者とは、そう、鉢合わせた元彼の婚約者。私は騙されていたという事で頭が真っ白になり実はあの部屋での事をあまり覚えていない。でも、私は何もせずに呆然としている所を彼が一方的暴行をふるって私をベランダから突き落としたわけではないのは何となく分かる。多分私もキレてかなり暴れたと思う。

しかし彼の婚約者、いや元婚約者は態と彼を陥れるような、そういった内容の証言をしてきた。そして、彼が彼女に、自分の都合の良いような証言するように頼み込んだけど、婚約者の行ったあまりの残酷な行動が怖くなり本当の話を証言することにしたと涙ながらに警察に語ったらしい。だからこそ、元彼が保釈されずにまだ留置されている事情である。私が言うのも何だけど、女って怖いと思った。

彼女にとっても、許し難い裏切りをしていた婚約者であった彼を、彼女はさっさと切り捨てたのだ。そして婚約破棄し、彼女も慰謝料を受け取るつもりなのだろう。多めに取る為により有利な状況を作り上げたという事だろう。私の弁護士がそう語っていた。私からあれだけ、貢がせておきながら、彼の実家はそれなりの資産家で、し

かも結構な高給とりだったらしい。まああの男の金遣いの荒さから、彼自身の貯金がどの程度あるかは分からないが――。しかし、彼女のその行動は本当に、お金の為だけなのだろうか？ 愛していた男への復讐も少しはあるのか？ ほんの一瞬というくらいの時間しか顔を合わせる事のなかった私には、何も分からない。

「もし、納得出来ない状況や、困った事があつたら、私に連絡してください。いくらでも相談にのりますから」

落ち着いた表情で私の肩に手をやり、力強くそんな事いつてくる。同じ弁護士でも、私の禿げあがった小太りの弁護士とはえらい違いだ。この男のこの表情を見れば、殆どの顧客は大船に乗った気分がこの人に任せようと思ってしまうのだろう。私は曖昧な笑みをそんな賢治に返した。

確かに格好良い男な事は確か。昔から私は、男性の好みはかなりベタ。つまりはメンクイ。しかし賢治に対して、そういった心のトキメキとか、一度も感じる事はなかった。まあ香織の夫にそんな感情を抱いたところで意味はないけど。どこかこの男を退いて冷めて見ている自分を感じる。もう、すっかり切り替えたと思っていても、失恋の痛手がい外の外、重く残っているのかもしれない。

そう最初は思っていた。でも違う、純粹にこの男が怖かったのだ、私は。その事に私はもう少し後になって気付くことになる。

愛しい風景

俺は、コチラを静かに見つめ返す鈴木薫を、観察する。知識として解っていたつもりだったが、性同一性障害がどういうものなのかを実感することができる。彼女は性格的には冷静で優しさとか柔らかさを人に見せるタイプではない。言葉使いにしても、所謂オネエ言葉でもなく、寧ろ男性的で素っ気ない。にも関わらず、俺は鈴木薫を理性だけでなく女性として認識している。女らしいと女であるというのは別なのだと教えてくれた。俺はこの前にいる人物を、女と判断し認識してしまう。彼女の後ろのベッドヘッドに『鈴木薫 男性 血液型A B型』という札がついていたとしても、不自然に、見つめ過ぎたのか怪訝そうにコチラを見上げてくる。どうも彼女を必要以上に警戒させている所があるようだ。

「いえ、花瓶とかも必要だったなと今更気付いてしまって。借りてきて、ついでに生けてきますよ。私は男だから、そのまま突っ込むだけになると思いますから、気に入らなければ、後で生け直してしてください」

鈴木薫は少し驚いた顔をしたがフツと柔らかい笑顔を浮かべる。再び花束に視線を戻し愛しげに百合を見つめる鈴木薫の様子に俺の中である一つの光景が脳裏にフツ浮かぶ。

なるほど、だからか……。俺は笑顔を作り花束を受け取り廊下に出る。自分の顔に貼り付けた笑顔が苦笑に変わるのを感じる。ナーステーションから花瓶を借りて洗面所に行く途中に香織の病室の前を通りすぎる。中にいた香織が面白いものを見るかのようにコチラを見ている。

香織はそつと点滴スタンドを連れて病室から出てきて、俺の腕にある花束を見てニッコリ笑う。昨日、鈴木薫への見舞いの贈り物を

相談していたから察したのだろう。

「綺麗！ イメージもピッタリね」

「あのさ、これ花瓶に生けたいから、手伝ってくれない？」

香織は笑顔で頷く。耳の調子もよくなってきたこともあり入院当時に比べ表情も明るくなった。その晴れやかな表情になんかホツとする。

香織の手によって、花束状態で窮屈そうだった百合が伸び伸びと華やかになって花瓶移し替えられた。一緒に鈴木薫の病室に行こうかとも思ったが、高梨さんから携帯に電話が入り、香織は点滴スタンドを押して慌てて通話スポットまで走っていつてしまったので、一人で鈴木薫の病室へといくことにした。

花瓶を届けてから、俺は鈴木薫と少しだけ当たり障りのない会話をしてから病室を後にする。俺が病室に長居しても迷惑なだけだろうし、事実俺がお暇の言葉を告げるとホツとした顔を彼女はした。

気が付けば病院のお昼という時間になっていた。俺は一旦病院を出て近くの喫茶店で自分もお昼を取る。ケーキ屋に寄り香織が好きそうなケーキを何個か買ってから、俺は再び病院に戻った。香織の病室へといく途中、鈴木薫の病室をチラリと覗くと綺麗に整頓されたベッドがあるだけで何処かに出かけているようだ。

「夜にでも薫さんと食べて」

ケーキの箱を渡すと香織は無邪気に嬉しそうな笑顔を見せた。あと一時間チョットで点滴が終わるという事なので、今日は病室で二人での会話を楽しむことにする。先程喫茶店で一人寂しく飲んだ珈琲より、香織と飲む自販機で買った紙コップの珈琲のほうが美味しく感じるから不思議なものである。

二人でノンビリとした時間を過ごしている内に、点滴の時間が終わる。看護婦が点滴チューブを外している様子を横で静かに見学する。毎日点滴するため、基本、針は刺したまま。チューブだけを外し、腕に残った針のついた部分に繋がっている簡単に短いチューブはテープで邪魔にならないように皮膚に固定される。今、気がついたがチューブの位置が昨日より指先の方に移動していて、昨日付けられいた場所は内出血起こしたのか醜く紫色になり、その真ん中で細い線状に、赤く腫れている血管が透けて見えた。俺はその余りにも痛々しい様子に、つい非難するような視線を看護婦に向けてしまう。そんな俺に看護婦は困ったように笑う。

「お薬がやや強いことと、奥様の血管が細めな事もあって、負けて少し炎症起こしただけです。心配されることはありませんから」

内出血位でとやかく言い気はないが、幾つかの針の跡や、内出血で醜く紫色に変色した腕を見るのは耐え難いものがある。これが他の人だったら、何とも思わないのだろうが、香織の事となると見が狭くなることは自覚しているが、感情の問題なのでどうしようもない。

「見た目は凄いいけど、痛いとかいうのもないから、大丈夫よ。それに内出血に効く塗り薬も貰ったし」

香織はそんな俺を宥めるように笑いながら、袖を下ろしさりげなく痣を隠す。やり場のない苛立ちを払うように俺は深呼吸する。ここでムカツいていても香織を困らせるだけである。

「もう、このあともう治療スケジュールないよね？ だったらチョット病院抜け出さないか？」

看護婦が去ったあとに、香織にそつと話しかける。ニコツと笑い香織は瞳に子共つばい光を宿し俺を見上げてくる。こんな所、香織には似合わない、俺は妻の手を引いて病室から連れ出した。

恋人同士のように腕を組みロビーを通った時。目の角に妙に賑やかで華やかな集団が目にはいる。

いかにも水商売という感じの格好の厳つい身体の女性たちと、突きだしたお腹と薄い頭が特徴的な男性が仲良く話をしている。本人達は楽しそうだが、病院内においてかなり目立っていて、皆奇異の目でその集団を眺めている。

その集団の中にいた、一人がコチラを見て軽く頭を下げる。鈴木薫だ。その厳つい女性達は性同一性障害の友達なのだろう。その集団の中では、身長があるものの細身の鈴木薫はますます可憐な女性に見えた。見た目の問題だけでいえば同じ他の性同一性障害の人に比べ彼女は綺麗な容姿をしていただけ幸せだったのかもしれない。と失礼な事を思ってしまった。性同一性障害として生まれた彼女の苦しみは相当なものはずなのに。

一緒にいた男性もコチラを見て、驚いた顔をしたが人の良い顔をしながらコチラに近づいてくる。佐藤満、俺の同業者だ。なるほどこの人が鈴木薫の弁護士なのかと納得する。彼女はなかなか、いい選択をしたようだ。簡単に佐藤氏に挨拶してから俺と香織は、外の世界へと飛び出す。

そういえば、最近はずつかりインドアになっていて、買い物意外二人で外を歩くことってあまりなかったかもしれない。

天然酵母の自家製パンを焼いているというパン屋さんでパンと、ホットコーヒーを買い二人で近くの河原までピクニックに行く。

河原に腰掛け二人で珈琲を飲みながら、風景を眺める。

「ところで、佐藤さんってどんな弁護士さんなの」

香織としては、友人の弁護士がどのような人物なのかどうか気になるところなのだろう。

「かなり優秀だよ！ 元検事だったこともあり、その経験もあつてこういった事件にはかなり強い。しかもさつき、強気な発言した所からも、有利に流れていると思う。大見栄や安請け合ひ的な発言をする人ではないから」

そう佐藤氏は見掛けこそ冴えない親爺だけど、弁護士界においても評判の優秀な弁護士である。検事だった経験と人脈をもち、それを最大限に生かし、数多くの結果を残してきている。無欲なのか、主義なのかは分からないが、弁護士もあまり高くなく、町弁として細々と小さい案件を数多くこなし弁護士を続けているようだ。でも以前弁護した客から、新しい客を紹介される事から、仕事に困るという事はないようだ。

価格面でも能力面でも、ウチの事務所に相談にくるより遥かに鈴木薫にとって良かったともいうべきだろう。

「なら、安心ね」

香織はニコッと笑ってから、気持ちよさそうに空を見上げた。俺も一緒に空を見上げる。真っ青な空に、羊のような柔らかい雲が一つだけポツカリと浮かんでいる。日差しの暖かさと、頬をなでいく風が爽やかで気持ちがいい。やはり外に出て正解だったようだ。

「なんか、こういうのっていいな」

同意のフフフという笑い声が隣から聞こえる。香織の方をみると、穏やかな笑みを浮かべ俺を優しく見あげている。暫く静かに見つめ合う。秋の風が二人を包みむように吹いていく。

俺は香織を抱き寄せ、キスをする。高校生のデートか！ というシチュエーションだが、あの時のドキドキとした高揚感とはちがう、満たされた深い幸福感を感じた。二人のこんな時間がいつも以上に愛おしい。そしてこの状況が俺にとって、失うわけにはいかない掛け替えのないものだ実感し、香織を強く抱きしめた。

あえて目を背けた風景

マンションの玄関のポストを覗いてから、エレベーターに乗り、四十二階のボタンを押す。自分で鍵を開け部屋に入る。

電気をつけると、住人が一人いないだけで彩度の落ちた風景が出現してくれる。俺は誰もいないのに、『ただいま』と言って玄関を通る。

別にそんなに汚す方ではないが、一人でいることで、テーブルに開きっぱなしのノートパソコンと書類は散らばったまま。ソファーには本が無造作に置かれと部屋が若干荒れていることに改めて気が付く。まさに今の俺の多少荒れた精神状態を表しているようだ。

来週に退院する香織にこんな部屋で迎えるなんてことは出来ない。

パソコンを閉じ、本を拾い書斎の机の上に移動し、書類の内容を見ながら整理する。今抱えている仕事の書類をまず纏めクリアファイルに入れる。そしてここ数日色々調べていたGIDについての資料を手大きく息を吐く。

別に鈴木薫に興味を持ったというのではなく、気になった物事についてついついトコトンまで調べてしまうのが弁護士の職業病ともいべき行動である。目の前に起こっている現象について、どのような問題が起こりうるのか？そしてその状況を自分が弁護する事になったらどうするか？そう考えて、その事を頭の中でシミュレーションする為に調べる。そういった知識の蓄積が、今後の仕事に大きく役に立つからだ。

今、手の中にある資料の中あるのはGIDという症状やその治療についてや、GIDの人間が関係していた裁判について抜き出したもの。今後鈴木薫の身にも起こるかもしれない事件でもある。男として生きるにしても、女として生きるにしても彼女には様々な困難

が未来に待ち受けているのは間違いないだろう。

といっても、鈴木薫が今後どのような人生を歩もうが苦しもうが俺には関係ない事だけど、この資料は香織にはあまり見せるものではないだろう。外から見えないように茶封筒の中に入れ、書斎の引き出しへと放り込む。俺はそれで、自分自身の言葉にならない苛立ちも一緒にそこに封印したつもりだった。

散らかっていたモノを片付けハンディーモップで埃を払っている
と、ふとりビングの棚の写真盾が眼に入る。その棚には俺と香織の
ツーショット写真や、高梨さんの写真や、俺の家族と香織と高梨さ
んが一緒にいった旅行の時の写真や、小さい頃の俺と香織の写真等
が並んでいる。その中に一つの家族写真がある。可愛い女の子を愛
おしげに抱き寄せた若い女性とその二人をさらに抱きしめて笑って
いる若い男性。香織の両親との最期の家族写真だ。この二週間後に、
香織を抱きしめていた二人の人物は交通事故で亡くなってしまふ。
香織を抱きしめている母親の顔を見て、俺は首を小さく横にふり、
写真盾を少しずつ移動し埃を払うついでに、その写真を奥におき他
の写真を前へと移動させた。大人気ない行動だとは分かっているも
の、今はその写真を見たくはなかった。その女性は今日、会った
鈴木薫によく似ていた。香織が鈴木薫に思わず救いを求めたともそ
こがあるのだろう。香織の母親が苦しんでいる娘の為に、姿を変え
てこの世に蘇ったなんて馬鹿な事を考えたわけではないが。母から
娘と繋がっていく想いというのを何処かに感じて辛かった。

携帯が震える。香織からのメールが来たようだ。

『ケーキありがとう。薫ちゃんと一緒に楽しく食べました。美味しかったです』

いつもなら、思わず俺を微笑ませてくれる香織のメールだけど、

今日は苦笑しか浮かべられなかった。俺が気にしなければいいだけだ。この気付いてしまったどうしようもない苛立ちを、あえて目を背けることでやり過ごすしかない。

気分を紛らわせるために、お酒を飲みながらTVで録画していた映画を観ることにする。『アマデウス』という天才作曲家モーツアルトを描いた映画で香織が面白かったと言っていた作品である。

誰よりも音楽を愛しそれだけに生きてきた男サリエリ、その前に現れたのは神の音楽を奏でるものの、幼稚でどうしようもなく品行下劣のアマデウス・モーツアルト。サリエリはモーツアルトの才能に誰よりも先に気付きそしてその音楽に惹かれていくが、同時に自分にはない才能をもつモーツアルトへの憎しみと、そんな才能をこんな男に与えた神を恨み闇へと落ちていく。物語を追いながら、俺はサリエリ自分を重ね、同じようにドロドロとした感情に心が満たされていくのを感じた。

観るんじゃなかった。最期エンディングに響く、アマデウス・モーツアルトの甲高い笑い声を聞きながらウィスキーを煽る。

あえて目を背けた風景（後書き）

『物語の中にある映画館』にて解説あり
アマデウス

<http://ncode.syosetu.com/n5267p/>

穏やかな日常的な風景

月曜日、俺は新聞を読みながらコーンフレークで簡単な朝食をすませ、歯を磨き、髭を剃り最期水で顔を洗いサッパリさせる。スーツに着替えモードを仕事へと切り替える。社会人というのはこういう時良いと思う。プライベートでどんな問題を抱えていようが、仕事をしている間は気を紛らわすことができる。

俺は精力的に午前中の仕事をこなしたとき、携帯に香織からメールが入っているのに気が付く。

『一日早めだけど、明日退院という事になりました。後は飲み薬で対応していくという事です。』

入院中色々迷惑かけてごめんね！ 明日から頑張るから』

俺の心に、少し安堵の気持ち広がるのが分かった。そして全てが元通りになる。俺はそう自分に言い聞かせる。

そして火曜日、早めに帰宅した俺を香織が笑顔で迎えてくれた。外にお祝いで食べに行こうと言ったのに、家の中には香織が作った料理の香りが満ちている。香織の存在により昨日とは打って変わって居心地のよくなった部屋の空気に、俺は心が安らいでいく。香織を抱き寄せその感触に自分が満たされていくのを感じた

香織が退院した事で、俺の愛おしい日常生活が完璧に戻ってきたように感じる。入院中香織に投与された薬は、突然に投与するのを止めるわけにはいかず、徐々に薬を減らしていく事が大事ならしい。薬の服用は暫く続くことにはなったが、日常生活には何の支障もなかった。それに入院中彼女の中で何か吹っ切れたものがあつたようだ。表情に笑顔が戻り、前以上に俺に甘えた態度を見せるようになった。俺が彼女不在の生活が寂しかったように、彼女も俺を離れて

いた事を寂しがってくれたのだろう。新婚当初のように、俺達はキスをして愛し合うそんな日々が始まる。

鈴木薫も香織から四日ほど後に無事退院したようだ。彼女の場合は外科ということもあり骨折といったものがそれで治ったわけでもなく暫くリハビリなどの為通院しての生活が続く。病院で生まれた香織と鈴木薫との友情は、二人が退院した後も続いており、リハビリに通う薫の為に車を出したり、一緒にショッピングを楽しんだりとしているようだ。楽しそうに薫の話をする妻を、俺は笑顔を作り黙って見ていた。

また鈴木薫の弁護士である佐藤氏からも連絡があり、かなり鈴木香織にとって良い条件で決着がついたと知らせてくれた。相手は、治療費とは別に、その間の生活費、そして相手の男性が鈴木薫からだまし取ったとされる金額、そして慰謝料といったものを諸々あわせて四百八十万円支払われることになったらしい。前端的に非を認めてお詫びとつもりというより、相手の傷害罪はもう間違いないという状況だけに、さらに詐欺容疑までをそれに上乗せしたくなった事と、相手の家族からしてみたら、さっさと鈴木薫との縁を切りたかったというのが本音なのだろう。まあどういう理由にせよ、シツカリお金を取れたのは良いことである。

俺は佐藤氏にお礼を言い電話を切ったあと、『四百八十万』という金額に思わず苦笑してしまう。とんだ事でこんなにもピツタリなお金を手に入れることになった鈴木薫が、今何を思っているのだろうか？ 夢が叶うと、喜び勇んで直ぐに精神科の病院へと駆け込んでいるのか？ 俺は頭の中から彼女を追い出すように頭を横に振った。

鈴木薫という存在も、一ヶ月たつと俺達夫婦の日常生活に馴染み平和に溶け込んだ。といっても病院で会って以降、鈴木薫とは顔を合わせていないので、香織通しての関わりではあるが、それくらい

の距離感が妻の友人との関係というのも丁度良いものなのだろう。

十月の半ば、久しぶりに早く帰れることになり、俺は香織に帰るメールを入れるが返事はこなかった。時間もいつもより早かったこともあるし、香織は携帯をバツクの中に入れたままということもあるので、俺はさほど気にせず家に帰る。

玄関のドアを開けると、室内には確かな香織の気配がする。「ただいま」と声かけながら家に入る。そして靴を脱ごうとして見慣れるものをそこに発見する。香織のモノにしてはかなりデカ過ぎるスニーカー。

「おかえりなさい、早かったのね」

奥から笑顔で香織が出てくる。そして表情だけで、リビングに来訪者がいる事を伝えてくる。

「こんにちは」

お客様に挨拶するために、リビングに入ると、そこには鈴木薫がいた。俺の挨拶にビクッとその肩を奮わせてコチラを見上げてくる。顔にあつた痣も殆ど目立たなくなり、髪の毛も美容院に行った後なのか、綺麗に揃えられていて病院にいたときよりもさらに女性らしくみえた。ただ俺をジッと見上げてくる目は、泣きはらした後なのか真っ赤になっている。入院中、あんな状態でも世間に立ち向かわんと強気で毅然としていた様子が嘘のように憔悴し、彼女が小さい子供に見えた。俺は怯えたように俺の方を見ている鈴木薫を静かに見返す。

優しさの形

退院し、私はその足で勤めていた店に顔を出すことにした。散々お世話にもなつたし、迷惑かけたママや仲間に挨拶をしたかったから。それに、治療費は全て加害者である元彼に支払ってもらったものの、僅かばかりの貯金だけでは、すぐにも尽きる。今の世の中、人間生きていくだけでお金かかるのだ。働き始めないと生活していけない。

ママは顔を出した私をやさしく抱きしめてくれ迎えてくれた。そればかりか、店をあげての退院祝いパーティーまで開催してくれて私はその暖かさや優しさに思わず泣いてしまった。やはり自分のいるべき場所に帰ってきたという事に安堵する。

松葉杖ではあるものの生活は元に戻る事ができた。顔の痣は暫くの間残ったものの、元々この店にくる客は、女性としての美しさを求めてくるというより、気を遣わない会話を楽しんでくるという所があるので大きい問題もなかった。むしろ痣や骨折をネタに話題も盛り上がる。人生多少躓いたからって、そのまま這いつくばったままではいられない。すぐにでも起き上がり歩き出さないと前に進めない。

入院前と後で、私のファッションはかなり変わった。入院前フェミニンなファッションを好んで着ていたが、退院後は化粧も薄くしまニッシュな洋服を着るようにしている。皮肉な事にそのほうが、男性であることを見破られることが少なくなった。

自分の顔だと、ガリーな洋服を着ていると洋服が浮くのだ。香織にその事を、指摘され一緒にショッピングにいき、そういう服を勧められて着てみてその理由はよくわかった。

よく良い年齢の女性がピンクハウスの洋服を着て違和感を出しま

くり、人から奇異の目で見られてしまふのと同じような現象を自分がひき起こしていたのだ。

シンプルな服に、帽子やアクセサリーでチョット可愛らしさを足すそれだけで充分、女性らしさを演出できるというのは、目から鱗だった。

そうして、松葉杖が必要であるとはいえ、元の日常とテンポを取り戻した。そんな時に弁護士佐藤さんが、上機嫌で花束を持ってお店にやってくる。

「薫ちゃん、俺頑張ったよー！ アイツからタップリぶんどってきてやったから。とりあえずコレお祝い」

華やかな可愛い花束と封筒を受け取る。その様子から無事元彼との闘争が終わった事を知りホッとする。私はその二つをお礼を言つて受け取り松葉杖な事もあり隣のホステスにその二つを託し、まず佐藤さんをソファ一席に案内する。

「えええ、薫凄いじゃない！」

気になっていたのか、コッソリ先に封筒の中を見たホステス仲間が興奮したように、書類を手近づいてきて隣に座る。佐藤さんもニコニコと笑っている。

私は彼女から書類を受け取り、その額に驚く。想定していた額より明かに多い賠償金の額に私は佐藤さんに目をやる。

「ちなみに、ソレはアイツが薫ちゃんから騙しとった百三十六万円と、君が入院中働けなかった間の稼ぐはずだった給与分も別だから」

私は佐藤さんの言葉にも、歓喜に沸く店にいる人のお祝いの言葉にも、何もリアクションも返せずにいる。喜びと同じくらい動揺が大きくて思考が止まってしまった。

「コレで、女の子になれるね」

抱きついてくる、彼女の言葉ますます顔が強張るのを感じた。

「大丈夫？ 薫ちゃん」

佐藤さんは、私の頭をポンポンと叩き顔をのぞき込んでくる。

「あ、大丈夫です。佐藤さん、ありがとうございます。本当に何とお礼言っているのか」

情けない事に、真っ先に言うべき言葉をやっと佐藤さんに言う事ができた。佐藤さんは、穏やかに笑って首をふる。

「あのさ、薫ちゃん。慌てる事は何もないんだよ。このお金はあくまでも、あの事件に対する一つの結果でしかないから。あくまでも単なるお金。すぐにどうこうしなきゃならないって事はないんだよ。君がゆっくり考えて君のテンポで人生を歩んでいけばいい」

女性になりたいというのは本心。その為に一生懸命女にお金を貯めていたものの、その金額が貯まるまであと三年くらいかかると思っていた。その時間をつかって覚悟というものも決めていくつもりだった。ところが今回のお金が一気に用意出来てしまったのは想定外過ぎた。親の事、これからの人生の事、様々な事が一気に頭によぎっていき、喜びより不安の方が膨れ上がっていく。

私は頭をやさしく撫でてくれる佐藤さんの手と心のぬくもりを感じ

じながら、ゆつくり頷く。

「本当にありがとうございました。佐藤さんが闘って勝ち取ってきてくれたこのお金。良く考えて大切に使いますから」

「じゃ、お礼に、冴えないオジサンをハグしてくれ」

戯けたようにいう佐藤さんを、私は感謝を込めて抱きしめた。

「ま、あえてそのまま生きるという選択肢もあるからね。貴方はどんな身体でも、私の可愛い娘な事は変わらないから」

ママの言葉に私は嬉しさと同時にチクリとした痛みを覚える。

この世界は、本当に外の世界と違って優しすぎる。こんな私でも誰も傷つけてくることはないし、暖かく包み込みこんでくれる。ついついこの空気に甘えてしまう自分を感じる。

でもここで守られているだけじゃいけない。自分の意思で立ち上がり、そして歩いていかないと駄目だ。

私は、ジェンダークリニックへ予約の電話をする。傷害事件のゴタゴタで一ヶ月何の連絡もしないでサボっていただけに、受付の人にもかなり心配された。ここにも、心配をかけている人がいた事に気付き申し訳ない気持ちになる。

事情を説明し、前回の診療をなしでキャンセルしてしまった事の非礼を詫び、次の週のお店の定休日に予約をいれた。

ジェンダークリニックに行くときはいつも緊張する。先生もスタッフも、コチラの気持ちをキチンとわかってくれて良い人ではある

から、不快な気持ちになるからというのではない。でもあそこは自分の事に向き合わざるを得ないからだ。

そんな事まで聞いてくるのか？ という問診や、インナーセックス性分化疾患ではないかチェックするための血液検査、外生殖器検査などの時は、治療を続けるのを止めたくなくなるほど苦痛を感じた時はあったけど、今は包み隠さず自分の悩みを晒せる場所となっていた。

とんだことでお金が用意できた事と、自分自身の戸惑いそんな事も含めて全てをここでぶつけるつもりで、私はいつも以上に化粧もシッカリして、香織と一緒に買った新しい洋服に身を包み、クリニックへと訪れた。

そして受付をすませ、待合室へといきベンチに座り本を取り出し、それを読みながら名前を呼ばれるまでの時間を待つ事にする。何故だろうか、人の視線を痛いほど感じる。私はその視線を感じる方に目をやり、そこにいる中年女性の姿を見て体が強張るのを感じた。

五十ちよつと前くらいの上品そうな女性が化け物を見るかのように顔を強張らせた状態でコチラをジッと見ている。そりゃそうだろう。自慢の息子だった人物が、堂々と女性の格好をして過ごしているのだから。

一年ぶりに会う母親は、別れた時よりもえらく老けて見えた。それだけ私は彼女を苦しめ悩ましてしまったという事なのだろう。私達は、かなり長い時間無言で見つめ合った。

優しさの形（後書き）

迷子の大人たち（USED PEOPLE）

1992年 アメリカ

監督：ビーバン・キドロン

キャスト：シャーリー・マクレーン、キ
ヤシー・ベイツ

ジェシカ・タンディ

マルチェロ・マストロヤンニ

マーシャ・ゲイ・ハーデン

シルビア・シドニー

ジョー・パントリアーノ

歪んでしまった親子の形

診察室の中、いつになく緊張感に満ちている。

正気を失ったかのように、ひたすら語り続ける母の存在が、空気をピリピリしたものにしていた。

実家を出てからも、公共の手続きというのをキチンとしてなかった為に、私は公的には、まだ実家で生活している事になっている。なので保険証の住所も実家のまま。

私はそういう診断までは受けていないが、実際性同一性障害の間は鬱といった精神障害に陥りやすく、自殺の道を選ぶ人も少なくない。そんな私と連絡がなくなった事で、病院は家に確認しようだ。動揺と混乱のまま生きていた母は、そんな電話をもらい更に心を掻き乱される。そして私と連絡がついた事を、病院から知らせてもらったらしい。母は子供の無事をその目で確認するために病院まで来た訳だが、そこで自分が最も目を背けたい現実を目の当たりにして今はもう狂乱状態である。

「いままで、ちゃんと普通に生きてこられたじゃない。だからそのまま生きていけばいいのに」

私の腕をもつて、目をギラギラさせて訴えかけてくる母。私はそんな母に『ゴメンナサイ』と謝ることしかできなかった。陽気で活き活きと生活を楽しんで、近所でも美しいと評判だった母が、今は糞れ目が大きく見え、何処か異様な空気を纏わせている。

「そんな事をして、貴方が幸せになれる筈ないじゃない」

「普通に生きるのが一番幸せなの、普通に結婚して、普通に子供をつくってそういう平凡な人生を生きて幸せになって欲しいだけなの」

そう必死で説得してくる母。もともとは上品で落ち着いた話し方をする人だった。でも、今は矢継ぎ早に、私や医師が意見を挟む間もなく言葉を紡ぎ出していく。私がもう自分も他人にも嘘をつき男として生きるのは無理だと何度も告げると今度は自分を責めだし、医者を責め、そしてそれ程までも彼女を苦しめる私を責めだした。

「なぜなの？」

母はこの言葉を、繰り返す。

母親の言葉は、ことごとく私の心を切り裂きズタズタにした。元々は教育ママな所はあるものの穏やかで優しい女性である。その母親をココまで攻撃的にさせてしまっているのが自分だという事実も私をさらに苦しめた。

「こんな事になるなら産むんじゃなかった！」

先生も『お母さん！』と怒鳴るような口調でその言葉を止めようとしたが。その言葉は彼女の口から発せられ、私の心に深く突き刺さった。

頭が真っ白になる。そして自分の頬に何かが流れる感覚だけを認識していた。音も色も匂いも何も感じられない。ただ、般若のように怒りを爆発させていた母の顔から表情が無くなり、私を驚いたように見つめるのを、映画のシーンをみるようにただ眺めていた。

耐えきれず席を立ち、松葉杖をつきながらも病室を飛び出した。慌てて看護婦さんが追いかけてきて、別室へと誘われる。こういう事に慣れているのか、看護婦さんはやさしく私を抱きしめ背中を撫でてくれた。

私もそうだけど、同じ性同一性障害傷害を抱えるホステス仲間ボディータッチや抱きつくといった事をよくする。それは他人の体温を感じたいからだ。そうすることで一人じゃないって思えるから。子供のように、他人の体温に安心したいからだ。

「知っています？ 人って愛している人ほど傷つけちゃう言葉を言うモノなんですよ」

看護婦さんは、『貴方は愛されているから大丈夫だと。すぐには無理だけど絶対わかり合える』とそう繰り返してくれた。その彼女の優しさは瞬間的に私を癒すことしか出来なかった。

とはいえ、もう母と顔を合わせるのも怖かった。私は大丈夫だからと一人になりたいといって彼女を仕事に戻らせてから、涙をしっかりと拭いてから、自分もその部屋から出て行く。

そして、そのまま病院を飛び出し、前に止まっていたタクシーに乗り込む。

「どちらまで？」

笑顔のタクシー運転手の言葉に私は悩む。ホステス仲間の顔、ママの顔、様々な人の顔が頭に浮かぶ。

「世田谷まで」

私はそう答える。暫くタクシーが走らせていると携帯が震える。病院からだった。そう言えば診察料も払わず出てきてしまった事を今更のように思い出す。そのことを謝ると診療代は母が支払ったと伝えられる。でも診察券はまだ病院にあるままなので、後日取りに

行く事にした。また、中途半端に終わってしまったカウンセリングをどうするか？ また来週でも再受診するかという提案もあったが、今は何も考えたくなかったので断り、一ヶ月後の定期診察の予約だけを願った。

最良の形

突然訊ねてきた私を、香織は驚いたものの、柔らかい笑顔で迎えてくれた。

「お茶がいい？　珈琲？　何か飲みたい？」

「どちらでも、いい」

悲しいのか苦しいのか、泣きたいのか叫びたいのかも、どうして良いのか分からなくて、グシャグシャの私を見て、香織は首を傾けて笑う。

「まず、顔洗ってスッキリしたほうがいいかもね。クレンジングと洗顔料も貸してあげるから」

それだけ、凄まじい顔しているのだろう。私は恥ずかしくなって、ただ黙って頷く。

清潔に整頓された洗面所に行く。涙のせいでファンデーションもアイメイクも滅茶苦茶になった自分が映った鏡をみますます気分がおちていく。

メイクを落として、顔を洗い、香りの良い柔らかいタイルで顔を拭く。

リビングに行くときルディングで彩られた暖かい空気がそこには満ちていた。その空気に私はなんかホッとする。

「薰ちゃん、ソファーに座って寛いで」

対面式のキッチンの向こうから香織が笑う。素直に言葉に従ってソファに腰を下ろす。トレイに載せたティーポットとカップをもつて香織はやってきて、隣に座る。

香りの良い暖かいお茶の入ったカップを手渡され、その香りと暖かさに張っていた気がほどけていくのを感じる。そして再び涙が溢れてきた。

香織は優しく私の背中を抱くように手を回す。私は彼女に抱きしめられながら、泣きながらお茶を飲む。私は今日起こった出来事の説明を始める。

「苦しめているのは分かるけれど……私だって普通に生まれたかった……なんでそう産んでくれなかったのかって……」

幼い子供のように、支離滅裂で辿々しい言葉を続ける私の言葉を、香織は黙って聞いてくれていてくれる。やさしく背中を撫でながら、母性に満ちた笑みを浮かべ私を抱きしめる。

「あああああ」

私は香織の小さい身体にすがりつき、声を上げて泣く。こんな泣き方をしたのって、幼稚園以来なのかもしれない。情けないはずの私を、香織はただ黙って私を抱きしめてくれた。洗剤のやさしい香りのする胸に抱きしめられ、私はただ泣き続けた。

思いつきり泣いた事で、少しは落ち着くことができた。私は香織が差し出したキルトに包まれたボックスティッシュを借りて鼻をかく。

「お茶、冷めちゃったね、新しいお茶いれるね。そうだ、栗の紅茶
つていうのもあるのよ！ それ入れてくるね」

香織は、コチラの気持ちを絶妙に察してくれる。抱きしめて欲しい
時抱きしめてくれて、自分を落ち着かせたいために少しほつとい
て欲しいときすつと離れてくれる。

冷静になると、大きく深呼吸をした時に、玄関の方から音がす
る。私はそこで改めてこの部屋にもう一人暮らしている筈の人物の
事を思い出す。

「いらつしゃい、薫さん？」

リビングに顔を見せた鈴木賢治は、驚いたように私を見る。

「すみません、こんな遅くまでお邪魔してしまつて。もう帰ります」

慌てて立ち上がろうとする私を、鈴木賢治は止める。

「ごゆっくりしてください……ご自分がどんな顔しているのか分か
つていますか？」

私を馬鹿にした笑いではなく、どちらかというと医者がするよう
な穏やかな顔だった。しかし思いつきり、泣きはらした醜い顔を晒
してしまった事にも恥ずかしさを覚え、顔を背ける。

「今の貴方は、迷子で弱り果てている子供のような顔している」

思つてもいない言葉に鈴木賢治の顔を思わず見返してしまう。本
当に泣いている子供を宥めるかのような悪戯っぽい笑みに、緊張が
解けていく。

「困っている子供を保護するのも、大人の役割だ。落ち着くまでいれればいい」

夫の鞆を持ちながらニツコリコチラを見守っている香織と『着替えさせてもらいますね』とネクタイを解きながら離れていく鈴木賢治をみて、これが大人の懐の深さというものののだろうか。それに比べて自分はなんと未熟で中途半端なのだろうか？ 結局私はそのまゝ、その優しさに甘えて、そのままソファに腰を下ろしてしまっただ。

「ケンちゃんも薫ちゃんも、お腹空いたでしょ、おまたせ。急いで作ったからこんなものしか出来なかったけど」

テーブルの上に、パスタとサラダが並べられている。その料理の香りで改めて自分が、お腹が空かせている事を思い出す。

台所で冷蔵庫の前に立っていた鈴木賢治が、ビールを掲げて『君も飲むか？』と聞いてきたが首をふる。

美味しいモノを食べ、穏やかな時間を過ごすことで、だいぶん落ち着いてきた。そして昼間とはちがい、賢治にも落ち着いて状況を説明することができた。商売柄、鈴木賢治が話を人から引き出すのが上手いということもあるのだろう。

「君に状況は分かった。ところで、君はその状況の何処を問題としているのかな？」

冷静な鈴木賢治の言葉に、思わず啞然としてしまう。言ってしまうは全てだ。そんな事もこの男は理解してないのだろうか？ グラスのビールを煽る目の前の男の整った顔を見返してしまう。

「私が、ちゃんと女として生まれていれば、もしくは性同一性障害じゃなければ何も問題はなかったけど」

根本的な部分を挙げるしかない。母のように興奮した人相手だとコチラもそのテンポに巻き込まれ動揺しまとも会話にならないけれど、こつも冷静に感じられると、コチラもジツクリと考えながら答えられる。

「過去についての、たら・れば論は、問題ではないよ。解決の糸口の参考になにもならない」

そついつてニツコリ笑う鈴木賢治を思わず睨んでしまつ。

「でも、それが問題だから、こんな状況に」

思わずカツと声を荒らげた私に、鈴木賢治は穏やかにコチラを見つめてくる。

「ほら、君が性同一性障害であることと、今の状況での問題は別だろ？ 悩んでいる人間というのは、とかく全ての事を問題にして、物事をさらに複雑にして混乱していくものだ。今の君のように」

鈴木賢治の言いたい事がなんとなく分かってきた。香織は私達の様子を見て、安心したように笑い、汚れた皿をもつてキッチンの方に行く。自分は口を挟まず夫に別の形で相談をさせることにしたのでらう。

「問題を解決したいなら、まず君がどうしたいのかそれを考えるんだ。そしてそれに対して何が傷害になつてているのかを考え。それを解決する方法とシンプルに考えるべきだ」

『私が望んでいる事』その意味を考える。『ちゃんとした女になること』

性別適合手術を受けて戸籍変更をする。でも、それが本当に女になるということなのだろうか？

「君はSRS（性転換手術）まで考えているのか？」

私は鈴木賢治の質問に私はすぐ頷くことができなかった。望んでいないという訳ではない。ただあくまでの社会的地位と見た目を変えるだけで、結局は男でも女でもないものになるという事に悩んでしまう。

でも今のままでは、いられない。私は頷く。

「今はどの段階まで治療を進めているの？ 第二段階？（ホルモン剤治療を伴う体質改善）」

首をふる。もう第二段階をしてしまうと、二度と後戻りはできない。生殖機能に根本的に打撃を与え元の身体に戻すことはできなくなる。男性でなくなる事は嬉しくはあるが、女性っぽくはなるものの女性に完全になれるものでもない。

それに、生殖機能を完全に失うということは、自分がさらに歪な生物になっていくような気がするのは、私だけなのだろうか？

「まだ、カウンセリング第一段階までです」

鈴木賢治は眼を細め、頷く。

「君は最終段階まで望みながら、その先に進めてないという理由は金銭的問題で？」

随分、性同一性障害の治療について詳しい事に驚きつつも、私は素直に質問に答える。

「それもあります。あとこの身体は私だけのものではない。親に理解してもらい許可をもらってからと」

「君は成人しているから、保護者の許可なしでも出来るけれど、そこで思いとどまっているという訳か」

その言葉をジックリ噛みしめながら頷く。

「つまり、SRSへの戸惑いではないと」

その言葉に、私は頷くことができない。戸惑いはハッキリいうとある。日本において、戸籍の性別を変更するには、現在婚姻をしていないこと、子供がいないこと（2008年より未成年の子供がいない事に改正）、元の性別の生殖能力を持たぬこと、性別適合手術済みであること、という条件が必要になってくる。要は『戸籍上に難しい事にならないであろう環境で、元の性別を完全捨て去り、形だけでも新しい性別らしい姿を整えたら性別を変更できる』という状況だけど、コレは本当に形だけの性を手に入れるにすぎない。

「まずはご両親を説得する前に、自分の意思というのを固めるのが先だな。どう生きていきたいのかという。そこが揺れていたら、ご両親と何を話し合うべきポイントすら分からないだろ？ まあ君の母親がもう少し落ち着くのを待つて、一緒に話し合うという方法もあるけど」

その言葉に、不思議と気持ちが高揚してくる。鈴木賢治の言葉

で、まったく見えなかった未来への路がうつすらではあるが見えてきた気がしてきた。

前に座っていた鈴木賢治は席を立ち、私の頭をポンポンと撫でて『書斎で仕事してくる』と香織に告げてから去っていった。

コトンと音がして、テーブルをみると前にココアの入ったマグカップが置かれている。香織ちゃんが私に慈愛に満ちた笑みで笑いかけてくる。

彼女の優しさと柔らかさが、私の傷だらけになった心を手当してくれて、鈴木賢治の冷静さが動揺で荒れまくっていた感情を沈めてくれた。本当に最高の組み合わせで良い夫婦だと思う。

それだけに、この夫婦に足りないものが改めて強く感じてしまう。

子供を虐待するような親が多くいる、なんで神様はそんな親の所ではなく、この夫婦に子供が与えなかったのか？

きっとこの夫婦の元に生まれた子供は幸せになるだろう。優しく暖かい母の愛と、強く包容力もある父親に見守られて。もし、私がこの家に生まれていたら、もっと冷静に私の問題も受け入れてもらえたのだろうか？ 香織と他愛ない話をしながら、そんな考えても仕方が無い事をぼんやり考えていた。

私はこの先、恋愛なり結婚することができたとして、女性の幸せは手に入れるかもしれない。しかし、自分の血をもつ子供を産み出すという生物としての幸せは永遠に味わうことはできない。

正直言つと『自分の子供を抱くというチャンスが永遠に失われる』、という事を今までそこまで問題に思っていなかった。実際性同一性障害を隠して結婚し子供を作り、ある日突然カミングアウトして奥さんや子供と揉めて裁判沙汰になるという話も意外とある。私にはその人物の事が信じられなかった。なんて自分勝手なのだろうか

？とも思う。偽りであれ、普通の生活を選択すること自体は悪いとは思わない。しかし、その道を選んだら最後まで貫くべきだ。自分の苦しみをさらに結婚相手や子供まで巻き込む事はないのにも思っていた。でも、今はその人物がチョット羨ましいと思ってしまう。

この夫婦と付き合いが、母性本能なのか、父性本能なのかは分からないけれど、そういうものが自分の中に芽生えさせた。

また、私は一人っ子であることから、父や母に対しても、女性になるという事以上に、自分が生殖能力を放棄するという事実を申し訳ないと感じてきていた。だからこそ、今日の昼間の母との会話が辛かった。

確かに自分で、まず、どうすべきかを、ちゃんと決めないとダメだ。私は、少し温くなったココアを一口飲む。そして大きく溜息をついた。

分岐点の風景

俺は書斎で、仕事要のノートパソコンで明日必要な書類の確認といった作業を行う。別に明日、職場でやっても十分間に合う事だったが、コレ以上鈴木薫と顔を合わせているのが嫌だった

彼女の置かれている状況には同情するし、真っ直ぐな為人には好感を持っている。でも鈴木薫という人間が疎ましくてたまらない。コレばかりはどうしようもない。

結局、鈴木薫はそのまま我が家に泊まることになったようだ。勝ち気で、どんな相手にも立ち向かっていく強さをもった感じの彼女だけれど、実の母親に傷つけられた心は思いの外ダメージが大きかったようだ。笑顔を取り戻したものの、その笑顔はどこか痛々しい。香織もそんな状態のまま彼女を帰すのが不安だったようだ。幼い子供のように温和しく香織に世話をやかれている鈴木薫を見ているとどうしようもなく苛立ってくる。そしてそんな自分に対して激しい自己嫌悪を覚える。

ベッドに入ったものの妙に目が冴えてしまい眠れない。寝てられず何度かの寝返りをうち、寝ることを諦める。時計を見ると二時前である。俺は隣で寝ている香織を起こさないようにそっとベッドから抜け出す。

喉が異様に渴いている、キッチンに向かう途中に、リビングのソファーベットのそっと目をやる。俺が通る音で、そのベッドのふくらみがモゾモゾと動き。鈴木薫が顔をあげコチラを見てくる。

「あ、申し訳ない。起こしてしまったかな？」

鈴木薫は、上半身を起こし、首をふる。俺のサイズのトレーナーを着ると、彼女は小さくみえた。それは俺の母親が、『香織とお揃い』と言って買ってくれた、クマのついたモノだが、あまりにもフアンシーすぎて俺が着なかったやつだ。サイズはともかくクマのアップリケに関しては彼女向けともいうべき服なようだ。

「いえ、なんか眠れなくて」

「……なら、飲むか？ 付き合ってくれ」

鈴木薫は起き上がり頷く。

ルームライトだけを付けた、アンダーなトーンの部屋で俺は鈴木薫と向き合う。氷を入れた二つのグラスにブランデーを注ぐ。鈴木薫は、俺の手からグラスを受け取り、小さい声でお礼を言う。そしてグラスの中の氷を溶かそうとしているかのように、両手でグラスをもつ。

「まだ、ウダウダ色々考えているのか？」

俺の言葉に、鈴木薫は苦笑する。

「簡単に結論出るなら、悩んでいません。貴方のような人だったら、悩むこともなく前に進んでいくのでしょうか」

そりゃそうだろう。もう少し思い切りの良い人物だったら、もう一人でも女になるために走り出している。鈴木薫は優しすぎる、それか親から精神的に自立できてないのか。家を飛び出したものの、

親が納得しない状態では次のステップに踏み出せない。

「いや、俺だっていつも悩んでいるさ、そして探り探り前に進んでいる」

言った後に、以外にマジな事を言ってしまったことに自分でも驚く。鈴木薫は驚いたような目でコチラを見る。

「意外です、貴方からそんな言葉が出るなんて。いつも自身満々で悩むこともなく、最善の道を選択し生きているように見えたから」

俺はその言葉に苦笑し、首を横にふる。最善な道か、確かにそのように生きていきたいが……。

「もし私が、男だったら、貴方みたいな大人になりたいと思っていたのじゃないか」

鈴木薫は、媚びるような感じでもなく、まっすぐ俺を見つめそんな言葉を言ってくる。子供なのか、この子の気質なのか。俺はまぶしいものを見るように彼女を見て目を細めてしまった。

「で、女性からみて、惚れるほど魅力的かな？」

照れくささもあり、嫌味っぽい言葉を返してしまう。彼女は露骨に嫌な顔をする。彼女の方も俺を苦手にしているのがなんだか分る。多分コチラの嫌気をどこかで感じとっているのだろう。

「格好良いと思いますよ。でも人のモノと思うと、そういう意味での魅力は激減ですね」

肩をすくめ冗談っぽい口調で返してくる。鈴木薫は結構思った事はすぐ顔に出してくるほうだが、流石にホステスしているだけあって、それをフォローするだけの処世術はあるようだ。

「それは良かった、俺としても妻の親友に惚れられても困るだけだったから」

「貴方は大して困りもしてないくせに」

鈴木薫は笑い、そしてグラスを傾ける。俺はその言葉が言わんとしている事は分かったけど首を傾げてみせる。

「貴方は自分の欲しいものといらないものをよく分かっている。いらないものは切り捨てるだけ」

確かにいらないものを、無意味にもっている趣味はない。欲しいものが分かっているか……その言葉をコイツから聞くとはいね。俺はグラスを持つ手に力が入るのを感じ、それを誤魔化すようにグラスを煽った。

「欲しいものか……全てを手に来る人ってどのくらいいるのかな？　ところで君の欲しいものって何なのだ？　女性としての権利か？　女性としての幸せか？」

鈴木薫は俺の言葉に一瞬ハツとした顔をする。そして唇を突き出すような形にしてジッとグラスを見つめる。ノーメイクでそういう表情をしていると本当に幼く見えた。

コチラはやや嫌がらせの意味を込めていった言葉でも素直に受け取りそれを真面目に考え返そうとしている。頭も悪くなく冷静な彼女が何故馬鹿な男に引っ掛かったのか、なんだかそういう所を見て

いるとよく分かる。純粹で無邪氣過ぎるのだ。

「本音で言っと『全て』なのでしようが、何かを捨てざるをえないのが現実なのでしょうね」

苦い笑みを浮かべ、俺にというより自分自身に言い聞かせるように鈴木薫はつぶやく。

そう誰でも諦める事が大切だ。現段階で手に入るべき幸せで満足すべきなのだ。欲張ってはいけない。本当に欲しいものの為に、彼女は決断するだろう手にいれるべきものと諦めるべき事を……俺たちのように。

「で、君は……捨てる事に、躊躇わないのか？ 後悔しないか？」

鈴木薫は俺の言葉に、酷く傷付いた顔をし、そして睨み付けてきた。躊躇わないわけではない、後悔しないわけではない、傷つかないわけではない、分かっている聞いて聞く俺も俺だけど、その痛みを帯びた表情に俺の心がちよつと晴れた気がした。

真っ直ぐコチラを見ている彼女の顔が、ふと香織のものに重なる、そしてその瞳に映っている自分の姿を見つける。

「すまない、悪気はない。ただ君がいずれの未来を選択するにせよ、そのメリットとデメリットをどの程度理解しそして考えているのか気になった。人は選択の時にメリットし目を向けなくなることがある。キチンとリスクを見据えての選択なら、覚悟は本物なんだと思う」

鈴木薫は、俺の言葉にその表情をゆるめ、瞳が揺れる。口先ばかりの言葉なのに、彼女は俺を許しそして、その言葉を心に刻んでいくようにも見えた。鈴木薫は首をブルブルと横にふる。

「覚悟ですか、そこまでいくほどまでは出来てないから、私はダメなんです」

俺は鈴木薫の空いたグラスにブランデーを注ぐ。

「いや、君は強いよ！ 弱いから選択出来てないんじゃない、優しいから出来てないだけだ」

鈴木薫は、ブランデーを一口のみ、ゆっくりと深呼吸をする。俺は人当たりのよい穏やかに見える笑みを彼女に浮かべているんだろう、内面に渦巻く苛立ちをしつかり隠しきって。その証拠に鈴木薫は俺を信頼しきった瞳で見返してくる。

俺は何やってるんだろうか？ 鈴木薫をどうしたいんだろうか？ さつさと自分達夫婦と同じ欠けた世界に引きずり込みたいのか、それとも……。

時計を見ると三時超えている。

「流石に、コレ以上酒盛りは止めたほうがいいな、そろそろ散会するか」

俺はそんな言葉を言って、強引に不毛な酒宴を終わらせることにする。

「こんな時間まで、お付き合いさせてしまってますいません」

鈴木薫は、申し訳なさそうに頭を下げる。

「いや、付き合わせたのは、私の方だ。もう、落ち着いたかな？

眠りなさい子供は寝る時間だ」

鈴木薫は、クスリと笑って、頷く。

グラスをシンクにおき、ベッドルームに戻り大きく溜息をつく。ベッドでは、香織があどけない様子で眠っている。そつとベッドに戻ったが熟睡しているようで目を覚ます気配もない。

俺は香織の寝顔を見つめながら、その頬を静かになでる。撫でられている頬がくすぐったいのか、彼女の表情が笑っているような顔になる。その表情に愛しさと切なさが入り込んできて静かに寝ている彼女を見続けた。

求める未来の形

鏡の向こうから釣り目でアイメイクをシッカリいれた瞳がコチラにジッと睨むように見ている。

私が言うのも何だけど、どちらかというと美人と言われる顔立ちだとは思う。でも、女性にしては幅が広くゴツく感じる体型と、柔らかさとか色気といったものが皆無の為にどうしても中性的な雰囲気漂わせている。

『形から入る』って、『格好だけで中身が伴ってない』といった意味もあるけれど、今の私はそれに必死で縋っている状況。

化粧することで、私は世間に自分が女性であることを表明している。生まれて初めて化粧した時の事を今でも鮮烈に覚えている。自分の性に違和感を覚え始めた時でも、医者にG I Dの診断を受けたときでもなく、化粧をしている自分の中に沸き起こる何ともいえない高揚感に、私は自分が女なのだと実感出来た。

今日は一ヶ月に一度のジェンダークリニックの日。私はいつも以上 念入りに化粧をする。前回母と鉢合わせした事の動揺が未だに残っている。その不安や苛立ちを隠すためにも、今の私には化粧の力が必要だった。

いつもより明るめのルージュを入れ、私は大きく深呼吸する。そして立ち上がり背筋を伸ばしてバックをもって部屋を出た。

ジェンダークリニックの受付を済ませ、待合室の方に緊張しながら進んでいく。

足取りが重いのは、松葉杖の所為だけではない。気が重いのだ。また母がいたらどうしようか？

実はアレからずっと携帯の方に、母から電話とメールは入っていた。

『こないだはゴメンなさい。私はただ貴方が心配なだけなの』

そういった内容のメールに、私は『気にしないから大丈夫。治療費を支払わせてしまつてご免なさい。今度お逢いした時にお返しします』と一回だけ返信した。

待合室に行くと、怖れていた通り、母がいて、私の姿を見て、少しホッとした顔をしたのが分かった。私は母に何て声をかけたら良いのか悩み、母から目を反らしたときに、彼女の隣に意外過ぎる人物がいることに気が付き驚く。高級そうな柔らかいデザインの薄手のコートを着たその人物は、コチラをみてホッとしたような表情をした。

「香織ちゃん？　なんで」

立ち上がって、母の隣の席を私に譲る。

「ゴメン来ちゃった。昨日の電話で元気なかったから。そして今薫ちゃんのお母さんとお話していたの。薫ちゃんってお母さん似なのね、逢つてすぐに分かった。この綺麗な方が薫ちゃんのお母さんだつて」

香織は母に視線をやる。二人はぎこちなく微笑みあう。

二人でどんな話をしていたというのだろうか？　母は私を見て、『待つてたわ』と弱々しく笑いかけてきて頭を撫でてくる。

結局二人がどんな会話をしたか分からないまま、名前が呼ばれる。私が立ち上がると母も緊張した顔で立ち上がり、一緒に診察室へ向かう。完全に私の症状を拒絶していた母が、このクリニックにくるといふ事自体は、私にとって自体は前進したといふべきなのだろうか？ 不安で振り向くと香織は手をふり、やさしい笑みをうかべそんな二人を見送ってくれた。

母が前回と異なり、聞く姿勢であったこともあり、今回のカウンセリングは、母に性同一性障害というものについての説明と、私が今現在どう思い何を求めているかという確認といった内容となった。

母がここに来たのは性同一性障害である私を認めただけではなく、母としての子供に対する想いからのようだ。そして母は普通りの母と息子という親子関係に戻ることが望みなのは、言葉の端々に感じられた。

性同一性障害は症状が精神的なモノだけに、気の持ちようで何とかなると思われがちだ。それが出来たなら、もうとつくに病院に来ることもなく自分で解決出来ている。

子供時代から女の子の気になり方が友達と違う事に何となく違和感を覚えていた。女の子への興味が彼女達の持ち物などへの興味となっているのだと思い込んでいた。女の子へ恋愛感情をもてず、寧ろ同性へそういったトキメキを覚える事に動揺し、最初は自分がホモなのかとかなり悩んだ。友達にも家族にも相談も出来ず、新宿にも行ってしてみた。しかし男性に男性として愛されることにも違和感を覚え自分がますます分からなくなった。そして同じ症状で苦しみ続けてきた今つとめているお店のママと出会い、やっとグシャグシャになった自分を受けとめている場所を見つけた。そして病院に行く決心をつけ今必死で自分と向き合い始めているのが現状だ。自分ですら受け入れきれない私という存在、母にはもっと難しいの

だろう。

「息子は、手術したとしても、女性として幸せになれるモノではないですよ？　なら今のまま男性として社会に溶け込んで生きた方が幸せなのではないのですか？」

先生は、その言葉に困ったように首をふる。

「どのような道を選ぶのが、薫さんにとって幸せなのかは分かりません。でも薫さんは、男性として扱われ生きてきた事で、ずっと一人で悩んで苦しんできたのですよ。貴方が、お子さんにどうあつて欲しいかではなく、お子さんがどう生きていく事が、薫さんにとってベターなのか？　それを一緒に考えていきませんか」

その言葉に母は、ジッと何かを考えるように黙り込んだ。私も先生の言葉を受け止め、その意味する所を考える。私だって母を苦しめて不幸にする未来を幸せだとは思えない。家族・友人、恋人など愛する人が不幸で何故幸せになれるというのだろうか？

「薫の幸せって、何なのでしょいか？」

母はつぶやくような質問に応えられる人は誰もいなかった。

自分がどうすれば幸せになれるかなんて、私自身も分からない。

でも、どう生きたいのだろうか？　確かにこのまま手術しないで男性の戸籍のまま生きるという道はある。けれど母が望むような女性との結婚なんて事とてもじゃなうけれど出来ないだろう。そして私は両親に孫を抱かせてあげる事は、どう逆立ちしても無理なのだ。その事を思うと申し訳なさでいっぱいになる。

女になったとしても、戸籍が女であるから結婚することは出来る。でもそこまで踏み込んで付き合える男性と出会う自信はまったくな

い。もし出会えたとして、その相手の家族は元男性だった相手との結婚は喜ばないだろう。

結局それぞれの感情がねじれながらも平行線のまま、二回目の母を伴ったカウンセリングが終わった。

診察室を出ると、香織が心配そうな顔で立ち上がりコチラを見つめてきた。私はそんな香織を安心させるように笑みをつくる。香織は私のその顔を見て、さらに隣にいる母へ視線を動かす。香織の視線につられ母を見ると、私が多分さつき香織にしたのと同じような意味の笑みを浮かべていた。

その後、この三人で近くの喫茶店でお茶を飲むことになった。

端からみたら、私達三人はどう見えるのだろうか？ 香織が他愛ない会話をふること、私は母とのこの距離をなんとか過ごす事が出来た。今のままではいけないとは思っているものの、今の私達親子の状況と、離れていた時間が二人の関係を強張らせぎこちないものになっていた。

喫茶店でUの字の形のソファに香織を中心に私と母という並びで座る。

「すみません、なんか今日私押しかけるような、差し出がましい真似してしまって。失礼な事も言ってしまったて申し訳ありませんでした」

喫茶店で落ち着いた時に、香織は改めて母に向かい頭を下げそう切り出した。母は静かに首をふる。

「いえ、コチラこそ私達親子の事で香織さんにお気遣いさせてしま

って。あと薫が色々お世話になっているようで……」

香織は慌てたように首をふる。

「いえ、色々助けて頂いていたのは私の方で。しかも私一人っ子なもので、薫さんと出会ってなんか妹が出来たみたいで」

香織は、そう言いながらニコリと私に向かって笑う。香織の『妹』
っという言葉に引っ掛かったのか母は、チョット困った顔をする。
そして、二人の様子を、黙って伺っている私に、母もジッと見つめ、そして何か決心したように顔を引き締める。

「薫が一番苦しんでいるのは分かっているの。そして私は母親として、本当は貴方を真っ正面から受け止めそして支えないといけない筈なもの。でも情けないことに、すればいいのか分からない。感情が追いつかないの」

その言葉に、私はどう言葉を返していいのか分からない。母をそこまで悩ませ動揺させているのは他ならぬ私だからだ。

「コチラこそ、ゴメン」

謝ることしかできない。母はそんな私に首を横にふる。

「貴方を責めているのではないの。私が悪いの。ダメな母親よね」

母は苦しそうに笑う。香織慌てたように首を横にふる。母と香織は暫く何故か見つめ合う。そして再び私に視線を戻し真っ直ぐみつけてくる。

「でもね、私は貴方が愛している。それだけは伝えておきたいの」

その言葉を理性で判断する前に、感情が先に反応し今日一日緊張し続けていた心が一気に弛緩する。そして頬に何かが流れる感触がした。

香織が、バックからハンカチを出し、私にそつと差し出してきた。私はまた泣いているようだ。

「正直、薫とどう向き合えばいいのか、何を言ってあげればいいのかも分からないし、これからも傷つける事もあると思う」

母の言葉に、私は泣きながら頷くことしかできなかった。そんな私を香織がそつと抱きしめてくれた。

「香織さん、私は薫の母親だからこそ、貴方のように今の薫を受け入れ、抱きしめてあげることが出来ません」

母の言葉に私を抱きしめていた香織がビクッと身体を震わせる。そして私から身体を離し母の方を向く。私はただ、二人の顔を交互に見る事しかできなかった。なんとなくその様子から二人がどういった会話をしたのかおぼろげに分かった。

「でも、もう逃げずに努力はします。まだ現実から目を背けようとしている私に、貴方が腹立たしいのは分かりますが、これが私の精一杯なんです」

母が苦しげに顔を歪む。その様子を見ていた香織は泣きそうな顔になり、母に向かって頭を下げる。

「申し訳ありませんでした。本当に不躰な事いいました」

ずっと下を向いたままの香織の肩に手をおき、母は優しい笑みを浮かべる。

「いえ、貴方には感謝しているの。そこまで親身に薫の事を想ってくれて。なのでお願いします。これから薫と一緒にいてください」

小さい声で、香織『はい』と小さい声で答え頷く。

人と争う事を嫌う香織が、私の為に替わりに母に立ち向かってくれたという事実と、その事で語ってもらえること出来た母の本音。私はもう泣くのを止め小さく深呼吸をする。

逃げていたのは母だけでない、私も向き合う事を放棄し背を向けた。これからは私も努力しないとダメなのだ。

「香織ちゃん、色々本当にありがとう。」

……そしてお母さん……」

何かを二人に言わないとと思ったけれど、そんな言葉だけしか出てこなかった。

母は何も言わず、小さく私に頷いた。

女達の作り出す風景

目の前で、紺のシックで上品なデザインのブラウスに身を包んだ美しい女性が涙を流している。俺に先程から必死に夫婦の愛について訴えかけている。

上質な素材に細かい所に配慮のなされたそのブラウス、妻の香織も好きなブランドの洋服である。その女性にも似合ってはいたが、俺に貞淑な妻であるかのように演じるために態々用意してきたのが見えるだけに、ちぐはぐな感じがした。

涙を流しながらも、化粧があまり乱れていない所は逆に感心してしまう。

たぶん状況をまったく知らずに見たら、ずっと陰ながら支えてきた夫に突然一方的に離婚を言い渡されたかわいそうな女に見えるだろう。でもその実態は逆で、世間知らずのボンボンに、恵まれた容姿と口の上手さでうまく取り入り結婚にこぎ着け、セレブの生活を手に入れた女である。贅沢な生活で満足していれば良かったのに、男遊びまで派手に行ったことで、彼女としては非常に困った事態に陥っているわけである。

「私は、哲さんを愛しています。哲さんもそれは同じ筈です。それなのに離婚なんて不条理過ぎます。お願いです！ 鈴木さんの方からも説得して頂けませんか？ 離婚は誰も幸せにしません」

「残念ながら、斉藤氏は貴方とやり直すという気はまったくありません。貴方が離婚を拒絶しつづけても、コチラの結論に変更はありません。このまま貴方が長引かせるような事があれば、あなたに慰謝料を請求という事も考えています。今のうちに承諾したほうがあなたの損失は少ないかと思えますけど」

（自業自得だろ！ 諦めてさっさと、こんな事で時間を使つてないで、次の力モ探せ。こっちも忙しいのだ）

内心の毒づきながらも、俺はニツコリと穏やかにその女に笑いかける。愚かだけど馬鹿な女ではないようで、俺側からは何も引き出せないと察したのか、しおらしい女の演技を続けたまま事務所から出て行つた。

予定外の来客で思わぬ時間をとられた俺は、大きくため息をつく。

えてして、男より女の方が演技は上手い。それを信じられるかどうかは別として。男だとも自然に情に訴えつつ自分の意見を相手がうつかり納得しそうな言葉を言えないだらう。男性だとディベートのように理屈で攻めるか、声を荒らげ力業だけでいくかという感じで、無理な力が働く分そこには衝突といった要素を生み出すことが多い。

女は小さいときから、ごっこ遊びというのが好きで、それで鍛えてきている。

香織も昔からそうだった遊びがすきだった。小さい頃付き合ってきたオママゴトでも、彼女が俺に与えた設定は夫であつたり息子であつたりするけれど、俺は俺のままであることしか出来なかった。でも香織は、時には俺の妻だつたり、俺の母だつたり、俺の妹だつたりと、その時々で見事にその役割を演じていた。

それは今でも同じなのかもしれない。香織は俺の妻でありながら、時には友となり、妹となり、母親となり、俺を受け入れ甘えさせてくれる。どの場面でも香織本人ではあるものの、彼女は場面で違う顔を見せてくる。

意地っ張りな俺が、彼女にだけ甘えられるというのも、それはその付き合わされてきたオママゴトでの訓練の成果があるのかもしれない。

最近では、香織はそのゴッコ遊びの相手は俺だけでなく、鈴木薫とも楽しんでいるようだ。この二人は親友といった関係をベースに、あるときは姉妹のような、そしてある時は母と娘といった感じに形をかえ接し、交流を楽しんでいるようだ。別にそう設定して遊んでいるのではなく、何気ない会話の中で状況に合わせて役割を変え分担していくのだ。端からみていると、それは面白いものがある。

鈴木薫も、そういった遊びが上手く、寧ろノリノリで楽しんでいるという所は、さすが女性というべきだろう。

その夜、一緒に夕飯を食べている香織がどこか元気がないのに気がついた。

穏やか笑みを作り、一見いつもの彼女であることを演じようとしているけれど、つきあいが長いだけに分かってしまう。何かに彼女が傷つき落ち込んでいるのが分かる。

「何かあったのか？」

仕事だったら、もう少し婉曲に相手が話しやすい空気を作ってから聞くのに、この世で一番俺が気を遣っているはずの香織には、ついこのようにストレートに聞いてしまう事が多い。コレもちょっと考えた方がいいのかもしれない。

案の定、香織の顔から笑みが引き、困ったような顔をする。

「いえ、何も……。ちょっと私、今日人に対して僭越な事してしまつて」

ごまかそうとしたが、ジツと見つめる俺の視線に観念したかのように話し出す。引つ込み思案で、寧ろ想いがあつても行動を起こせない事に落ちこむ事が多い彼女にしては珍しい事態である。

「香織が、そういった事を人に出来るとは思わないけど。気のしすぎではないのか？」

香織はため息をつき、首を横にふる。

「私ね、昨日まで薫さんの、お母様に、怒りを感じていたの。なんでも可愛い子供をあんなにも苦しめ傷つける事が出来るのか」

確かにあれほど気丈な鈴木薫を、ボロボロするほど傷つけることができたのは、悪意ある世間でもなく、実の母親である。

でも、俺の見解では鈴木薫の母親は、決して悪い母親ではない。寧ろ息子を性同一性障害にした事で、自分も責めている所もあり、ただ気が動転しているだけなのだろう。先日病院に来たという事からも、向き合おうという視線を示している事からも、良い母親だとは想う。

鈴木薫も、それは分かっているだろう。寧ろそんな母親の言葉だからこそ傷ついたのだ。

「で、今日病院まで行つて、会つてきたの……」

香織がそこまでの行動を起こしたという事に、俺は少なからず驚いた。でも口を狭まず、彼女のペースでゆっくり話させることにした。

「……なぜ、母親でありながら、苦しんでいる子供を抱きしめてやれないのか、さらに傷つけることができるのかって」

香織はそこまで語り、顔を苦しげにゆがめた。

確かにそれは、あくまでも第三者である香織が言うには、言い過ぎの言葉である。俺はある程度、鈴木薫と距離をとって付き合っているから、推測できる鈴木薫の母親の心情。でも間近で鈴木薫だけを見て、彼女の苦悩や悩みを見守っていた香織にはそこまで見えなかった。

軽率すぎた香織の行動を諫めるべきなのだろうが、香織はすでにその間違いに気がついて苦しんでいるから、俺はあえて何も言わなかった。

「『あなたが抱きしめられないなら、私は抱きしめる、そして薫さんのすべてを受け入れ慈しむ』って啖呵まできって、馬鹿よね」

香織の瞳から涙があふれ、ポロリと垂らす。俺は近くのティッシュボックスから紙を取り出し、彼女に渡す。

「薫さんのお母さんは、君になんて言ったの？」

香織は涙をそっとふき、そして、小さく深呼吸をする。

「……お礼を言ってきた……『自分の息子の事をそこまで想ってくれて』と……私はあの人にひどい事言っただけなのに……そして、『今の自分は、何一つ母親らしい事できないから、今だけ私に見守ってほしいと』」

涙を流したまま、会話を説明する香織を俺は静かに見つめた。

そのまま痛みを感じているかのような表情で黙り込む。苦しんでいる一人の女性をただ傷つけただけという事実が香織を悔やましているのだろう。

「香織、確かに、君は出すぎた真似をした。良かったのは、薫さんのお母さんが頭もよくまだ冷静な方だった事」

その言葉に香織はビクッと肩をふるわせる。

「君は今回の事で、分かっただろ？ 薫さんの問題で苦しんでいるのは薫さんだけでなく、家族みんなもなんだと。俺たちは性同一性障害の彼女を受けいられるのは、やはりどこか無責任で無関係もいい立場にあるからだ」

香織は、『無責任でも無関係でもいい』という言葉に、眉をひそめたが何もいわなかった。

香織も、鈴木薫が恋人という立場だったりしたらまた感情は別だっただろう。自分が愛した男が、たとえば俺が性同一性障害だったらどう想うというのだろうか？ 鈴木薫にしたように受け入れ自然に接することが出来ないはずである。

「でも、君はあえてそこに関わったんだ。だったらちゃんと最後まで見守るべきだと俺は思う」

ジッと考えるように下をみていた香織は、その言葉に俺を静かに見あげた。そしてその瞳に力がこもる。

「でも、私に何が出来るといふの？」

「薫さんのお母さんに、申し訳ないと想うなら、薫さんだけでなく、

彼女も受け入れてあげるべきだ。もし出来ないなら、そつとしてあげろ」

本当は、あまり余計な事に深く関わってほしくないというのが本音だが、もうここまできたら、香織は無関係で生きていく事は出来ないだろう。ということとは、俺もそれなりに鈴木薫とこれから関わっていくという事実に内心いらだちなからも――。

女達の作り出す風景（後書き）

コチラの物語の展開上、前の話の香織の行動を少し変更を加えさせていただきました。勝手にいろいろ変えていってしまって申し訳ありません。

父と子の形

『閑静な住宅街』 私が育った街はまさにそんな言葉がピッタリの場所。花に満ちた庭のあるお洒落な住宅が建ち並び、公園などの緑も多く、商店街には美味しいと評判のパン屋さんやケーキ屋さんなどが軒を連ね、住民は上品で穏やか、子供を育てるにも最適な環境。

私もそんな街は好きだった。家への帰り道、お洒落な雑貨屋さんで文房具を見たり、花屋さんの前で季節の花を楽しんだり、パンやコロッケを買って食べながら帰ったりと、その街での生活は楽しかった。しかし今は十二月という季節の所為だけでなく、どこか寒い空気に私は震えながら歩いている。いや、街自体は冬だとはいえ花壇には花が植えられ、早くもクリスマスを思わせる飾りがされ、家庭的な暖かい幸せそうな雰囲気満ちている。

もっとクリスマスに近づけば、この近所ではTV取材までくるくらいにクリスマスイルミネーションをした通りもあり、より賑やかに目出度い感じになるのだろう。

私にはそれがもう遠い世界の事のように思え、疎外感を早くも覚えていた。重い足取りで再びこの町を歩いている。化粧もあえてせず、ジーンズに皮のブーツ、そして紺のダッフルコートに、赤と白のボーダーのマフラーを深く巻いている。寒いというよりも、顔を隠すために。街ゆく人が、私を見ているわけでもないのに、その視線を気にしながら、通い慣れた筈の道を重い足取りで進んでいく。

母と私は、あれからはかなりぎこちないながらも、対話は出来ている。理解してもらえたとは思えないけれど、メールや電話のやりとりもあり、かなり良好になったというべきだろう。人間って不思議なもので、どんなに違和感があるモノでも慣れていく。母も少しずつ、今の私への拒否反応も少なくなっただよに見える。香織が母

とママに連絡をとっているようで、前みたいに一人で悩まなくてもよくなつた所も大きいのかもしれない。

そして今『良かつたら、今週末でも家に帰ってこない？ 薫の好きな物作るわよ』と母に言われ、かなり敷居の高くなつてしまった実家へと向かっている。

久しぶりに家に帰れること事態は嬉しい。でも久しぶりすぎて緊張する。しかも家には母だけでなく、父もいることが私の心をさらに重くしている。母はカウンセリングと一緒に受けていることもあり、性同一性障害についてはそれなりの知識もついてきて、私を受け入れるまではいなくても、理解はしてくるようになってきた。しかし父は？ 大学教授をしていることもあり、厳格でしつげにも厳しい人だった。曲がつた事が大嫌いで、それが子供からしてみたら他愛ない悪戯であつてもこつぴどく怒られた記憶がある。純粹に尊敬をしていた、だからこそ失望させてしまったであろう事が辛い。

今の父との繋がりには、銀行口座に毎月振り込まれている生活費。家出した直後、それまで相談にのつてもらっていたお店のママの家でお世話になりつつ、今後の生活をどうしようかと、銀行カードを使い預金の残高を調べて、私は記憶よりも明らかに多い残高に驚く。銀行で苦しい言い訳をして新しい通帳を手に入れその記載から父からのものだど気付く。私は最初の賃貸契約の時にその一部を使わせてもらったものの、自分の給料が出るようになってからその分を戻し、手紙で無事であること、仕事を見つけ新生活を始めた事と、お金のお礼と落ち着いたときに返却をする旨を伝えておいたが、毎月きっちり十五万というお金が振り込まれ続けていた。それに手を付けることもできず、私は毎月の通帳記入の度にその数字を見つめなんとも言えない気持ちになっていた。

『お父さんも、薫の事すごく心配しているのよ。薫と会いたがつて

いる』

母はそう言う。それは本当なのだろうが、今の私の事を父は今どう思っているのか、薫にはまったく読めない。元々、それほど会話がしてきた訳ではない、薫がテストで満点とった、運動会でこんな事があつたという報告をして、それに対して父は『えらいな』『頑張ったな』といった簡単な言葉を返すだけで会話が終わった。

父が自分の言った言葉を喜んでくれているのも分かったし、褒めてくれるのも嬉しかったので、ソレを寂しいと思った事はないけれど、このような事態になった時、どういった会話をすれば良いのかまったく分からない。

カミングアウトしたとき、父は目を見開き驚いたものの、私を睨み付けるような表情のまま何も言わなかった。『大変だったな』とも『信じられない』といった言葉も一切なく、その拳が細かく震えているのが分かった。失望が大きく、何か言葉を言う気にもなれなかったのかもしれない。

半狂乱になった母に追い詰められるように家を出てその後の事は一切分からない。それだけに今日実家で父の向き合う事が恐ろしかった。

そういう事もあり、今日は流石に化粧してスカート姿で帰る勇氣はなかった。しかも昔からここに暮らしているだけに女の姿を近所の人に見せて、両親が住みにくくなるというのも辛い。

しかし、不思議なものでズツと女性の格好をしていた所為なのだろうか？化粧なしでパンツルックの自分の姿はどこか中性的だった。自分は男でもなくなっているようだ。だとしたら、私という人間は何なんだろうか？

様々な事を考えているうちに、家に辿り着いてしまう。久しぶり

の実家は外観的には殆どかわりないものの、ガーデニングが趣味だった母の庭とは思えない程、庭の花が少なかった。最近植えたと思われるシクラメンが門の脇の花壇で咲いていて、玄関の前に申し訳程度にセインポチアが置かれているだけ。そして玄関には懐かしいサンタ帽子をかぶった雪だるまの置物が私を迎えてくれていた。

私はそれを軽く撫でてから、深呼吸して玄関のベルを鳴らす。鍵はもっているけれどなんか鍵を使って入るのは躊躇われる。母の声がかきこえ、玄関が開く。

「おかえりなさい」

母は柔らかに笑う。それだけ見ると昔に戻ったような気分になるけれど、以前に比べてその顔は痩せていて、表情もどこか弱々しい。

「……ただいま」

以前なら、そこから話題も色々広げられていたけれど、今の私にはそれ以上どう続けていいものか分からない。

「寒かったでしょ、今日は泊まっていくわよね？ 部屋に荷物おいでくる？」

私は黙って頷き、二階に上がると、二階のトイレのドアが開き、出てきた父と鉢合わせになる。私はただ何も言えず父の顔をまじまじと見つめてしまう。元々若々しいという顔ではないものの、父も少し痩せたように感じた。

「薰、帰ったのか、ならばちゃんと挨拶をしなさい」

「……ただ今、戻りました」

「……おかえり」

父はそれを聞いて静かに頷き、書斎へと入っていった。

私は動悸を感じながら、かつて自分の部屋であった筈の扉を開ける。そこには去年の秋からまったく時間が動いていない空間は広がっていた。

綺麗に掃除はされているものの、青の落ち着いたシックなカーテンと、青と黒のストライプのベッドカバーで男の子らしいシンブルなインテリア。机の上そろえて積まれている教科書や参考資料は、あのとき投げ出した課題に使っていたものだ。あの時抱え続けていた狂おしいまでの苦悩が、部屋にそのまま残っているようで私は軽いめまいを起こしそうになる。インテリアのクールな色と季節の所為もあるのかもしれないが、部屋が酷く寒く感じた。

私はバツクを床に落とすように置き、ふらつく身体を委ねるようにベッドに横になり自分を抱きしめる。どうしようもない恐怖と、帰ってきたという喜びがゴツチャになってどうという表情をしてもいいのかわからない。少しずつベッドが私の体温が伝わり暖かさをもってくる。その暖かさに縋るように、私は目をつぶる。

『おかえり』という両親の言葉を抱きしめつつ、まだまだ問題が山積みの親子関係で、この後どんな時間を過ごせば良いのかと不安で震える。

人生の形

寝転んだままどのくらいいたのだろうか？ 五分くらいだったような気もするけれど、一時間程だったような気もする。扉から遠慮がちなノックの音が聞こえる。返事をする、そつと扉が開き、母が顔を出す。

「薫ちゃん、大丈夫？ 気分悪いの？」

私は慌てて起き上がり、『大丈夫』と首を横にふる。そして母に付き添われて下に降りる。リビングに入ると、母が暖かい甘酒を出してくれた。酒粕と牛乳と蜂蜜で母がよく作ってくれたその味と暖かさに私はホツとする。

寛いだろうか？ 部屋の風景の色が少し彩度を増したように感じた。

「美味しい」

私の言葉に母がフフと嬉しそうに笑った。二階から父が降りてくる気配がする。父がリビングに入ってきて、私の前のソファに腰掛ける。母が父の分と自分の分の甘酒も用意して、三人でしばらく静かに甘酒を飲む。空になった器が三つテーブルの上に置かれ、私は改めて父と母と向き合うことになる。

「散々心配をおかけして、申し訳ありませんでした」

私は、まずこれだけは言わないといけなかった言葉をする。

「いや、お前がこうして元気にいるから、それでいい」

父は先程よりも幾分柔らかい表情で、私を見つめている。

「お金も、ありがとうございます。今、自力で生活も出来ているので、お返しします」

父はその言葉に苦笑する。

「返すのは、お前が本当の意味で自立してからでいい」

どう言葉を返すことが、この場合正解なのだろうか？ 私は分からずただ父を見つめ返す。父の言う自立ってどういう意味なのだろうか？ ただ一人暮らしが出来る事ではないようだ。

「ところで怪我はもういいのか？」

息子が、男性相手に恋の修羅場を繰り広げ大怪我を負ったというのは、父親としてどういう気持ちなのだろうか。私は申し訳ない気持ちで、父の顔をまともに見てられず目をつい反らしてしまう。

「はい、もう日常生活するぶんにはまったく問題はないです」

「そうか」

父は簡単な言葉で答える。そのまま、皆黙り込んでしまい、なんとも居心地の悪い空気がリビングに流れる。

母が空いた器をお盆にのせ、台所へと一旦下がり、お代わりを入れて戻ってくる。

再び、満たされた器の白い液体を私は静かに見つめる。

「――か？」

ふいに父が話しかけてきた。しかし突然だったために聞き逃してしまった。

「あつ。すいません、ボウツとして」

父はやや、気不味そうに珍しく一瞬目を反らした視線を私に戻す。

「お前は、これからどうするのだ？ どう生きたいのか？」

正直な気持ちを言うと、女性として生きていきたい。でも父はそれを喜んではないだろう。そう訴えると父はどう思うのだろうか？ 私は何も言えず黙っていると、父は溜息を大きくつく。

「男性として生きるにしても、女性として生きるにしても、お前は人生どう生きるつもりだ？」

その言葉に、覚悟を決めて本心をいう事にする。

「お父さんは不快でしょうが……女性として生きて生きたいです」

緊張しながら父の様子を私はジッと観察する。父は口をへの字にまげしばらくはやら考えているようだ。そして眉を潜めフーと息を吐く。

「聞き方が悪かったな、性別の問題ではなく、将来設計はどうなっ

ているのか？」

私はその言葉に私は父の顔をポカン見つめ、母にその意図を問うように視線をやるけれど母もポカンとしている。

「今、お前は飲食店に勤めているようだが、それがお前のしたかった事か？ 一生やっていきたいと思っている仕事なのか？」

その言葉に私は悩む。私のような人間を雇ってくれるという所自体が少ない。私を暖かく受け入れてくれて心地よいから、そこにいるということではない。それを私がやりたかった事かと言われると、否と言わざるを得ない。私は首を横にふる。

「医大をお前は選んだ、それはお前の夢があつたからではないのか？」

医大に入学したものの、青臭い人の役に立つ人になりたいという気持ちでの事、明確に医者を目指していたのかというと今となっては分からない。人の事よりも自分の事でいっぱいになってしまふ私に、人を救えるとも思えない。今となつては自分が何をやりたいのか分からない。

「実は、休学届けを出しているので、大学の籍はまだある。戻るのもよい、退学して別の未来を目指すのも良い、自分の足で人生をまづあるけ！ 一番大事なのはそこだろ？ 私にとって、お前が男として生きる、女として生きるそんな事は些細な問題だ」

じつとテーブルを見つめたまま黙り込んでしまった私に、父はそう言葉を続けた。私は思わず顔をあげ父の顔を見る。真っ直ぐ私を見つめてくる父の顔を見て、やっと今の言葉の意味を私の中に入っ

てくる。

これが男性なのだ、いや父親というもののだと私は改めて実感する。情で愛してくれる母とは違って、理性で見守ってくれようとしている父。

同時に父親という人物を見損なっていた、自分が恥ずかしかった。私という子供を認められる人物ではないと。そう思い込んでいた。しかし、自分の父はそんな小さい男ではなく、自分が思っている以上に格好良くに器の大きい男性だった。なのに自分はいったら、向き合うことすら最初から放棄してあらゆることから逃げてしまった。

私はもう逃げては駄目だ、父と母に散々心配かけ悩ませてきたのだから。これ以上私が馬鹿な事をして二人を悩ませるわけにはいかない。しかし、情けない事に、今の中途半端な状態でなく、女性として生きるという事だけしか考えずに生きていた自分に、父の与えた課題は難しかった。どう生きたいのか？

「今すぐに答えを出せとはいってない。でも私も母さんも、いつまでもお前を守っていけるわけではない、一人でも生きていけるだけの力をつけることを考える」

「はい」

そういう短い言葉しか返せなかった。私は多分父の前で涙を流したのは子供の時以来なのではないだろうか？ ボロボロ目の前で泣き出してしまった私に父は呆れるわけでもなく黙って見つめていた。母は私に近づきティッシュで子供にするかのように涙をふいてくれた。

私は家に帰ることができたんだ。本当の意味で。私は今はただその心地よい安堵感に身を委ね母の胸に抱きつき、ただ泣き続けた。

聖なる日の風景

すっかりクリスマスムード一色で、脳天気な風景となっている商店街のからちヨット外れた所にそのケーキショップはあった。勿論そのお店もクリスマスツリーが置かれサンタの飾り付けがされていてクリスマス雰囲気だが、ウツディーな置物で統一されていることもあってか、節操ない派手さはなく、男の俺でも入りやすい空気になっていた。扉を開けると、ベルの音がして店員さんの元気な歓迎の声が聞こえる。

「クリスマスケーキを予約していた鈴木です」

バイトと思われる若い女の子は笑顔で応じて、奥の部屋にケーキをとりに行く。奥の部屋には我が家分だけではない、いくつかのホールケーキの入った箱が積まれていた。クリスマスの日程前であるものの、我が家と同じように土曜日にクリスマスパーティーを開催する人も多いのだろう。

今日我が家のクリスマスパーティーに参加するのは、メンバーは俺と香織と高梨さんと俺の両親の五人。俺と香織が子供の時は、クリスマスに高梨さんの家でパーティーをしていて、俺の両親は仕事が休めたとき、もしくは土日であったときのみ参加という感じだった。しかしメンバーの全てが大人になってから、こうしてクリスマス前の週末にホームパーティーをするのが定番になっていた。

「お待たせしました」 此方のケーキでよろしいですか？

鈴木様と書かれたケーキの箱をあけ、サンタやトナカイの乗った可愛いクリームケーキを店員は見せる。俺が注文したのではないのでそれで良いのかは分からないが、生クリームのホールのクリスマス

スケーキでサイズも合っているので頷く。店員は笑顔で頷き、箱を閉める。

「お持ち帰りのお時間はどのくらいですか？」

この気候で、その移動時間なので、いらないだろう。

「十分くらいなので、保冷剤はいいですよ」

「かしこまりました。あと、蠟燭はつけられますか？」

その言葉に俺は悩む。

そもそもクリスマスケーキに蠟燭を立てる意味ってなんだろうかという事に。誕生日ケーキなら、誕生日の人が願い事をして蠟燭の火を消すことで叶うという意味があるけれど、クリスマスケーキにたてる蠟燭は何のためなのだろうか？ 子供時代、高梨さんも蠟燭を必ず蠟燭をたてそれを、俺と香織と一緒に吹き消してみんなで拍手をして笑い合う、そんな事をしていた。しかし、俺が高校に入った辺りから流石に恥ずかしくなってきた、それ以来香織が一人で吹き消している。そして結婚してからは……。

「いえ、いりません」

俺は蠟燭を断り、ケーキだけをもって店を出た。

クリスマスとは本来は、イエスキリストの誕生日でハッキリ言うと、キリスト教以外の人には関係ないイベントの筈。何故キリスト教徒の少ない日本でここまで一般的なイベントになったのだろうか？ しかし日本でのクリスマスのイベントは基本、ケーキ食べてみんなで騒ぐそういったイベントでしかない。ケーキ、ご馳走、プレ

ゼントがあることが重要で、大本の理由であるはずのジーザス・クリストは何処かに追いやられているのが現状である。子供にはサンタクロースというファンシーで素敵な存在もあり、クリスマスを神秘的なイベントとなっているが、大人となつてしまった今では、単なるチヨットした飲み会となっている。

俺のクリスマスもそんなほぼそんな感じである。

家に帰ると、美味しそうな料理の香りが俺を迎えてくれる。前の日から泊まりにきていた高梨さんと作ったチキンといった料理がテーブルに並んでいた。部屋にキルトでつくったクリスマスリースやツリーが飾られていて、早くも我が家はクリスマスムードが漂う。

玄関のベルが鳴り俺の両親が加わったことでさらに賑やかな空気が室内に満ちる。美味しいワインと料理と、気の置けないメンバーでのパーティーは楽しいものではある。このメンバーになると一番社交的母が話題をもりあげ、それを皆で付き合うという感じになる。

「本当に最近の、若い社員のモノの考え方にはついていけないわよ！ 賢治はまさかそんな事はしてないわよね」

言葉は通じるのに、意志の通じない新人に苦勞しているらしい母が此方にその矛先を向けてくる。

「母さん、この年齢でそんな馬鹿だったらどうしようもないだろ」

言つた後に、しまったと思う。

「あんたも、もう三十超えてしまったのよね……私も年とつたものだわ！」

母が大げさに溜息をつく。

「ケンちゃんは、昔からシッカリした子だったわよね」

俺がなんとか話を反らそう口を開く前に、高梨さんがノンビリとした口調でそんな事を言ってくる。

「それは、高梨さんの前だけなのよ、家では一人っ子だから態度もでかいし我が儘で」

確かに可愛い息子だったとは思えないが、世間一般的な基準からいえば、出来た息子になると思われる俺を母はボロクソに言う。まあ、それが母親の愛情表現ではあるのだが、聞いている時は苦笑しているしかない。他のメンバーからみたら微笑ましいのか、ニコニコと聞いている。

「カオちゃんには申し訳ないと思っているのよ！ もう少し息子を、可愛くしつけておくべきだったと。ごめんね、こんな息子で」

母にとっては、口は妙に立つし態度も身体もデカイ俺は可愛いがりがいがないようで、その分の愛情表現を香織に向けている所がある。男物の服も買い物していても面白くないらしく、香織をつれてショッピングをしたがる所もある。まあ可愛がってくれるのは嬉しいが、もう少し遠慮というものを覚えて接して欲しいと思う。最近には特に。

「え！ ケンちゃんはとっても優しいですよ！ 男らしいし格好いいし！ 私には自慢の旦那様です」

香織はニコリ笑い、平然とそんな言葉を言ってくる。世間一般の姑と嫁の関係のように気を使った会話をしなきゃならない二人で

はないだけに、こんな事を本音でサラリと言ってくる香織に、父も母も高梨さんも思わずフフと声を出して笑ってしまう。俺は流石に恥ずかしくなり視線を明後日の方向に向けるしかない。

「本当に、あんたらは仲良すぎよね。出会ってから……もう二十五年……よね？ そんなに一緒にいるなんて、下手な夫婦よりも長くよくそんなに喧嘩もせず……なんで、そんな仲良くてまだ子供いないのかしらね」

母は大げさに溜息をつく。

「まあまあ、こればかりは、神様がお決めになることですし、仲の良い夫婦だと子供が入る余地がないから逆になかなか子供が出来ないといえますよ」

高梨さんがやんわりそんな口調で母をなだめる。

「そろそろ、ケーキでも食べるか」

俺は、強引にその話題を終わらせてたくて、隣の香織に話しかける。香織は頷き、立ち上がり皆の皿を纏め片付け始める。母も高梨さんも散々訪れている勝手知ったる場所だけに、一緒に立ち上がり食器を下げるのを手伝いだす。話題がなんとか終わったことに折れはホッとする。

テーブルの上を片付いたので、高梨さんと母はテーブルに戻る。香織はまだキッチンで珈琲の準備をしているようだ。母がケーキを箱から出して皿に移しているので、俺はキッチンのカウンターの所に行く。

俺も立ち上がり、カウンター越しに香織の様子を伺う。真剣でいながら、どこか楽しそうに粉にゆっくりと細くお湯を落としていく。

表面がふくれあがり泡立ち、珈琲の心地よい香りが立ち上る。最近の香織は強くなったように見える。ふとした拍子に見せていた、傷ついたような痛そうな表情というものを最近は殆どしない。でも本当に強くなったのか、それとも俺に弱さを見せないようにしているのか？　そこが読み切れない。

「どうしたの？　ケンちゃん」

難しい顔をしたままの俺を心配そうのぞき込んでくる香織に、安心させるように笑顔を返す。

「カップを先に運ぼうと思って」

香織は俺にフワリとした笑みを返す。俺をいつもなだめるときのあの表情だ。

「ありがとう、助かるわ」

香織の笑みに、俺は出来る限り明るい笑みを返す。カウンターの所に香織が用意してあったティーカップセットをトレイごと持ち上げる。

俺のこうした奇立ちや弱さが、香織を強く振る舞わせているような気がする。守らなきゃいけないのに、逆に心配させているなんて、何やっているのだろうか？

テーブルに戻ると母がケーキの箱の中を何故かのぞき込んでいる。

「あら？　蝋燭は？」

「いらないだろ？　付けてもらわなかった」

俺の言葉に、母は露骨にガツカリとした顔をする。

「まったく、貴方は気が効かないんだから！ ケーキには蠟燭はつきものでしょうに！」

「誕生日ケーキならともかく、クリスマスケーキにろうそくたてるのって可笑しくないか？」

俺の言葉に母は首を横にふる。

「貴方も昔は、喜んで吹き消していたくせに！」

それは分かっている。ただ、大人だけの集まりで蠟燭を吹き消すという行動はなんかオカシク感じたからあえて貰わなかったのだ。

「力才ちゃん、賢治ったら蠟燭もらってくるのを忘れているのよ」

母が珈琲ポットを持ってきた香織に言いつけるように話しかける。

「あら、まあ仕方がないですね。じゃあ今年はなしでいくしないですね。そうそうこのケーキ、最近近所に出来たケーキ屋さんのものなんですよ！ どのケーキも凄く美味ので、今年はソコにお願いちやっただんです」

珈琲を各カップに注いで香織が席に戻ったところで、ケーキが切り分けられ静かにお茶会が始まる。

「やはり、蠟燭吹き消すのがないと、なんかしまらないわね」

母はまだ、気になっているようだ。

「まあ、蠟燭は昔ケンちゃんが消したがつたから付けていたものだから、今はもう大きいしね、蠟燭喜んで消したがる人も今はいないし」

懐かしそうに言う高梨さんの言葉に、俺はヤレヤレと溜息をつく。だからあえて蠟燭を貰わなかったのだ。そういう事を一番似合う存在がこの会にいない事を益々感じさせるから。

「二人に子供が生まれたら！ また楽しめますよ！」

母は目を輝かせそんな言葉を高梨さんに返す。こういう顔をしている母は危険だ。

「お母さん、あのな」

それ以上、言わせたくないの俺は口を開くが、何故か母は俺をキッと睨むように見つめてくる。

「今日だけは、きっちりこの場を借りて言わせてもらっわね！ あんたもそろそろ本気で子作り始めなさい！」

「お前な、そういう事は親子とはいえ」

父は口を挟むが、母は首をふる。

「あのね、のんびりしている二人に任せておいたらいつになることやら、賢治ももう若くもないのよ！ コレ以上ゆっくりしていたら、子供が大人になることあんたはお爺ちゃんよ！ それに香織ちゃんも欲しいでしょ？」

香織は曖昧な笑みを返すことしか出来ない。

「お母さん！」

俺はやや声を荒らげて止めるが、母は首を横にふる。

「すごくいい温泉があるって聞いたの、賢治も仕事もいいけれど、頭がそんな事で一杯だから駄目なのよ！ お金出してあげるから、あんたはだから休暇をとってノンビリ温泉につかって子供つくってきなさい」

俺はその言葉に大きく溜息をつくしかない。今日は香織を責めな
いで俺に矛先を向けてくるだけマシなのかもしれないが、俺はこの
話を早く終わらせたかった。

「温泉ですか素敵ですね、だったら皆さんで一緒にいきませんか？」

香織はのんびりと、そんな言葉を母に返す。だんだん母の会話の
流し方が上手くなっている。

「いやいや、香織ちゃん賢治が二人で行く事に意味があるの！ こ
れも親孝行だと思って行つてきなさい。こんな我が儘な息子の世話
をずっと一緒にいて、香織ちゃんも疲れているでしょ。だからたま
にゆっくりしなさい」

香織は俺の方をみて、肩をすくめる。そしてニツコリ笑う。

「どうします？ 賢治さん、お言葉に甘えて温泉いきますか？」

とりあえず、ここはひいて母の言うとおりにしておけば話は終わるかと思い、俺は慚然とした気持ちで頷く。しかしその場しのぎの誤魔化しでしかなく。母はいつまでもこうして、この話を繰り返してくるのだろう。何の解決にもならない。

いつまでも俺達はこういう、やりとりを続けねばならない？ 俺が真実をぶちまけたら終わるのだろうか、そうしたら傷つく人が増え、全てが台無しになる。俺は大きく溜息をつく。

凹と凸の形

世間一般の人はどのくらいの期間家出をするものなのだろうか？
私は一年と数ヶ月で家出状態を脱する事にした。世間からいうとあらゆる意味で路を踏み外してしまったという時間だったものの、私には色々考えるにはそれくらいの時間が必要だった。

私はその冬、実家で両親と年越し蕎麦を食べて除夜の鐘を聞き、元旦には食べ慣れたお雑煮を頂きながら同じお節をつつくそんな、いかにもな一家団欒の時間を過ごす。そして話し合いの結果、私は一月の終わりに借りていたアパートの契約を解約して、実家に戻ることにした。まだまだぎこちない関係ではあるものの、もう逃げることを止めた。まだまだ悩んでいていろんな意味で中途半端な私だけど、そんな私を両親にあえて晒して一緒に生きていく道を、家族で選んだ。お店の方も相変わらず続けているので、その時だけ女性らしい格好で化粧して出かけることになる。そんな私の姿を両親はやはり複雑な表情をするが、何も言わずに見送ってくれた。

そして、私は改めて性同一性障害である自分が世間とどう向き合うべきかという問題について考えるようになる。両親と、同じGIDである友達らと相談し色々話し合う。

父のいう所の、私が人としてやりたい事は何なのか？ 私に何が出来るのか？ そしてそれを世間に認めてもらえるものなのか？ 選んだ道によっては世間といらぬ衝突をする事も多いだろう。

私のような人間を受け入れてくれる業種はかなり限られる。いくらか就職する前に女性としての戸籍をもっていたとしても、『性同一性障害』変態』もしくは『精神障害』危ない』というイメージもあるので、倦厭する会社も少なくはない。GIDである事を会社に伝えたら首になったなどいった、信じられない事も平気で起こってい

る。

私のようにまだ社会に出ていない人間は、直接はそれが理由といわれ弾かれることはないだろうが、面倒なもの、ややこしいものは最初から避けるという意図で、就職もかなり難しいものになるようだ。

芸術家や、メイクアップアーティストや、美容師の業界にそういうGIDやゲイの人が多いのは、そういう人間が人とは違った感性を持つ事から美的感覚が優れているからとかいう人もいるけれど、それは違う。私はファッションに人並みに興味はあるし美術館とかに行くのも好きだけど、そういう素養があるかというと首を横にふるしかない。絵は下手ではないものの、人に誇れるレベルなんかではないし、手先は器用でもない。

それは器用な人が多いというよりも、手に職をもつということが、生きていくということに有効だからだ。

私に何が出来るのか？ 自分と改めて向きあってみると得意な事は勉強だけという、結構つまらない人間だということに気が付いた。医大のシラバスを改めて見直し、大学を訪れ、学部や就職課などの職員等とも相談する。大学の職員は流石に私という人間に接してあからさまに嫌悪感をみせて来た人はいないが、大抵の人物はまず驚き、それから腫れ物に触るようになり気を遣っている分かる対応をしてきた。

『就職となると、今普通の学生でも厳しい状態だし、同じ能力をもった人物なら、障害のない人を選ぶそれが会社というものだ』と
いった否定的な意見。

『別に君の場合は健康だし、能力に問題があるわけではない。要はやる気の問題だ。君は性同一性障害だから就職出来ないというのは、

障害を理由に言い訳を作ろうとしているだけだ』という人もいる。『障害』という言葉を聞いた際に、自分が世間から思われているイメージというものを再確認してしまう。

相談すればした相手の数だけ様々な意見が返ってきて、それがさらに私を迷わせる。どの意見も世間というある一面を表現していて、間違えてはいないのだろう。

医大だけに医者をおののまま目指しても、それは就職へと繋がるものなのだろうか？ でなければ資格をとってMRを目指すのか？ 企業の顔となる人物に態々GIDの人間を選ぶのだろうか？ GIDを個性として受け入れてくれる所か、能力だけを見てくれる場所とということになる。

結論が今日も出ないまま大学を出て私は溜息をつく。勤め先である新宿のお店に向かう。いつものように仕事仲間に元気に挨拶して、化粧を直し、店に出て、常連客と楽しく話して盛り上がり、いつものように一日が終わると思っていたときに、珍しい客がお店を訊ねてくる。草臥れた親父とか、冴えないサラリーマン、愚痴をいいのOJといった感じの客の多いこの店には珍しいスーツをキツチリ着こなした二枚目の男、鈴木賢治である。

ドアを開けゆっくり店内を見渡し、私の顔を見て手をあげ爽やかな笑みをよこしてくる。ホステス仲間は、賢治の登場に色めき立つ。たしかにこうして見ると格好よいから、それも仕方がないかと思う。

「偶々、近所まできたので」

スーツ姿の賢治は、なんていうか男の色気というのか？ ストイックさの裏にある男臭さ滲みでいて、格好よく見えた。

「なに？ 薫ちゃんの彼氏？」

興味ありげに、皆が聞いてくるのを慌てて否定する。賢治もその言葉に苦笑いをしている。当たり前だが、その左薬指にはプラチナの指輪が光っている。

なんとなく、目立たない奥の席に案内する。この男がこのお店にきて騒ぎにきたとは思えないし、キャピキャピしたホステスに囲まれることも嬉しいと思えなかったのだ。

なんかこのお店で、賢治と向かい会うというのもなんか不思議な気持ちである。親とか親戚がお店にきたのと近い感覚なのだろうか？ とりあえず営業スマイルをつくる。

「何か飲まれます？」

賢治は首を横にふる。

「いえ、車で来ているので、申し訳ないけれどウーロン茶を。あと、少しつまめるものがあれば」

時計をチラリとみると、今十時過ぎ。なんか心の奥がザワザワする。この男何しにきたのだろうか？ と。

「何か夜ご飯は食べられました？」

賢治はその言葉にフツと笑い頷く。

「先程、事務所で店屋物だけだね」

最近の仕事が忙しいらしく、『いつも帰りが十二時前後になる』といった話を香織がしていたのを思い出す。

しかし、そんな忙しい男が何故この店に来たのか？ お酒を飲みに来たわけでもない、お腹を満たしにきたわけでもないようだ。しかも香織が家で待っているというのに態々ここに寄ってきた意図が分からない。ホステスの心得『コチラからヘタに探りの言葉をいれずは駄目。相手のタイミングで話させる！』というママの言葉を思い出し私はあえて余計な事を言わないことにした。

「そういえば、ご馳走様でした」

店の様子を眺めていた賢治は、私の言葉にポカンとした表情を返す。

「温泉土産、香織さんから頂きました」

賢治は『ああ』と納得したような顔をし、その後何故か片頬だけで笑う。

「もしかして、香織さんと喧嘩されました？」

言ったあとに、余計な事を口にしてしまった事に気付き慌てる。賢治はフツと笑い首を横にふる。

「いや、喧嘩なんてしてないし、いつも通り夫婦仲は良好だけど何故？」

その言葉にホツとしながらも、おずおずと理由を話すことにする。

「いえ、貴方が態々このお店にきた理由が分からなくて、ここに来るくらいなら家に帰って休みたいと思うものだ」と

賢治はその言葉を聞き、クククと笑う。

「いや、君にチョット渡したいモノがあつてそれだけで寄つただけだから。君が将来について色々今考えているときいてね」

そういつて手にもつていた書類袋を私に差し出す。

「コレは？」

此所で開けていいものか分からず、私は受け取つた袋の表面をしげしげ眺める。

「G I Dの人間が関わつた裁判の記録だ。今後社会に出たときにトランプルに巻き込まれたとしても、どう対応すればよいのかの参考になるかと思つて」

「あ、ありがとうございます」

私は戸惑いながらもお礼を述べる。確かに役立つ資料かもしれない、読んで楽しいモノではないが。私と香織はかなりの頻度で逢つているので、香織経由で届ける方法もある。にも関わらず、忙しい人が時間をわざわざ作つて私に会いにきた理由が分からなかった。

「ところで君は、もうホルモン治療は始めたの？」

私は首を横に振る。あれは精神的にも不安定になるので、まず大学の問題、目指す道を決めてからと考えているから。今、男でも女でもないこの私を両親は受け入れてはくれているという安心感もあり、今という状況を、前程嫌悪感を抱かずに過ごせるようになっていた。賢治はシニカルな笑みを浮かへている。私を蔑んだという

ものではないが、その表情に嫌なモノを感じた。

「そうか、でも、おめでとう！ 前と違ってスツカリ吹っ切れた表情をしている」

一見し人好きのする、爽やかな笑顔に優しい言葉、でも、私の心にいつものように染みてこない。

「お陰様で、賢治さんに色々相談にもものってもらいましたし」

その言葉に賢治はまた嫌な感じの笑みを返す。

「しかし君の両親も、随分苦しい決断をしたモノだ」

私の心にその言葉がチクリと突き刺さる。言葉に詰まる私に、一見穏やかに見える笑顔を賢治は向けてくる。

「そして君は、もう未練はないのか？ 自分の子供を作るという事に」

正直言えば、愛する人に出会い恋愛し結婚して、その人との間に子供が欲しい。それに親にも申し訳ない気持ちも大きい。しかし女になる為には、生殖機能を諦めなければならない。

「欲しいモノ全てを手に入れられるなんて甘い事考えていませんので」

私は、何とも言えない苦々しい気持ちをはき出すようにそう答える。賢治はというと、そんな私を変わらぬ穏やかな笑みを浮かべている。薄暗いお店の照明でも、その目が笑っておらずコチラを観

察するように見ているのが何か分かった。

前々から何となく気が付いていた事だけど、私はこの男に嫌われている。いや、何故か憎まれている。私はこの距離で賢治と向き合っている事がだんだん怖くなってくる。

「でも、君は全てを手にいれられる方法があるよ。香織とね」

私は、思わず目の前の男を睨み付ける。この男はまだそんな事に気にして、こだわっていたのか。私を女性として扱いながら、香織の近くにいた男性の機能をもった存在を警戒していたのか。

「私は前にも言いましたけど、女性は抱けません！　そういう間違いはありえない」

お店の中ということもあって、私は怒りながらもかなりトーンを抑えてそう答えた。その言葉を受けた賢治の表情に私は恐怖を感じるようになる。賢治の顔はニヤリと笑っているけれど、そこにあるのはどす黒い怒りの感情。生まれて初めて殺気という現象を、身をもって体験する。

「香織にそんなつもりで近づいていたのなら、とっくに排除している」

『排除』という物騒な言葉をサラリと言ってくる賢治に、私の背中に冷たい汗が流れる。

「君に、一つ良い提案をもってきた。どちらにとっても悪くない。香織にとっても」

賢治は幾分毒気を抑えた感じでニッコリと笑ってきた。

崩れていく風景

季節の移り変わりは人間の生活に変化を与えて当然だが、人は何故勝手に自分達で作った区切りである週とか月とかいったモノに縛られて、こうも窮屈な思いをしなければならないのだろうか？

昔とは異なり、コンビニは無休で開いており、ショッピングビル、スーパーも下手したら元旦から開いているような現在において、年末年始なんて、あそこまで特別扱いしなくてもいいのでは？ と思ってしまうのは俺だけなのだろうか？ しかも、人は年末年始に何か揉めなくなるようで、この時期は何故か弁護士という仕事は忙しい。それに加え、休日も多くなるので、俺は目の回るような時間を過ごすことになる。

前月にある末日から今月にある一日の境目と、大晦日から元旦へと境目、時間は同じリズムで刻み進んでいく。なのに人はその時に大騒ぎをする。俺と香織は、年末年始も俺の両親と高梨さんの五人で賑やかに過ごした。元旦は皆でお節を突き、二日に初詣に行きつつショッピングを楽しみ、三日目、両親と高梨さんを玄関で見送る。俺はやっといつものテンポの時間が戻ってきた事にホッとする。

皆が帰った後の片付けをしている香織を後ろから抱きしめ、そのまま明るいリビングで愛し合う。

『ケンちゃんったら！』

終わった後も甘えるように香織に抱きついていて俺を、香織が子供をあやすかのように笑いながら撫でる。俺はさらに甘えるようにはだけた香織の胸に顔を埋める。そのまま大の大人二人が、小さい子供ようにじゃれ合い笑いあう。子供の頃に出会って、二人で大人になり、再びまた子供に戻っているなんて、我ながらおかしい夫婦だと思う。

残りの休日はそんな感じでまったり過ごし、ようやく俺は心地をつくことができた。

そして休みがあげ、再び慌ただしい日常が再開する。とはいえ、大きな問題があるわけではなく、平和な生活である。

香織を通して、鈴木薫の情報が聞きたくはないけれど、入ってくる。意外な事に、両親が理解とまではいけないものの歩みよりを見せているようで、思ったよりも話が順調に進んでいるようだ。俺の中でどうしようもない苛立ちと焦りが募ってくる。

香織は自分の事のように、ニコニコ笑ってそういった情報を俺に話してくる。鈴木薫を応援し彼女が幸せになることで、香織自身も幸福感を感じようとしているのだろう。

俺は、その夜、あまり訪れた事のない新宿二丁目という地域に足を踏み入れる。以前鈴木薫からもらっていた名刺を頼りに、雑居ビルの地下にある『モンゴメリー』というお店の扉を開く。

その店は、かなり厳つい身体で男つ気のある明るいママが切り盛りしているお店で、古さが味わいになっていく感じのスナックだった。良くいえばアットホーム、悪くいえば泥臭い感じ。常連も多い様子で平和な空気の流れるを感じる。一見である俺はかなりその空気から浮いているのを感じる。

鈴木薫はお店に入ってきた俺を見て、驚いた顔を見せる。仕事仕様のメイクなようでかなり濃い目、元々整った顔立ちのせいにより華やかさを増して彼女をさら艶やかにしていた。彼女は驚きながらも、奇異の視線を浴びている俺を気遣って奥まったシートに案内する。

もともと、客に媚びたり、持ち上げたりとして楽しませるお店ではないらしく、店の人は皆気ままに会話を楽しんでいるようだ。鈴

木薫の知り合いであるという事もあり、俺を興味ありげに見るものの他のホステスは近寄ってこなかった事にチョットホッとする。

鈴木薫は、突然訪れた俺が不思議だったのだろう。笑顔で俺を迎えたものの、少し退いたスタンスで接してきた。

人は自分を映す鏡と良くいったものだ。香織と向き合うことで、俺は自分の弱さ情けなさというものに気付き、鈴木薫と向き合う事で自分に欠けていて喉から手が出る程欲しているものの存在を見せつけられる。

鈴木薫の事が嫌いだというよりも、そこで見えてくる自分という人間に嫌悪感を抱いているともいうのかもしれない。

香織と鈴木薫が惹かれあったのもよく分かる。二人は良く似ている。真っ直ぐで純粹で、どうしようもない程お人好しで危なっかしくて見てられない。まるで本当の姉妹のようだ。だから苦手としながらも、鈴木薫についつい口を出してしまう。そして香織にぶつけられない苛立ちが、より彼女に向けているのというのもあるかもしれない。

しかも、香織は敢えてやり過ごしてくれる細かい事に、敏感に悉く反応してくる。俺の気に障る形で。

俺達は、そんな微妙なやり取りをした後に、車で送るという理由をつけ二人で店を出る。

かなり警戒しているのに関わらず付いてくる所が、この女の甘い所で優しさでもあるのだろう。もし此処に俺が単なる知人として居合わせたのなら止めている。身体は男性であるから、いざという時も対等にやり合えるとも思っているのだろうか？

暫く黙ったまま、二人とも正面を見つめたまま移動する。フロントガラスの向こうには冬特有の妙に抜けた風景が広がっている。カーステレオを付けてない為に気まずい空気だけが車内に充満している。

「で、今日は私と何の話し合いがしたくていらしたのですか？」

耐えきれず先に口を開いたのは、やはり鈴木薫の方だった。俺は先程のやり取りで感情的になっていた自分を落ち着かせようと必死だった。

「申し訳ない、何でもない。聞かなかった事にしてくれ」

笑顔を作り、ここで引き返す事も今なら出来る。しかしそうするには、もう心は限界を超えていた。俺は大きく深呼吸してから車を路肩に停めレバーをパーキングに動かす。会話に集中出来るように鈴木薫は車を停めた事に、一瞬びびったようだが、大通りで人通りも多く車もいっぱい走っている場所である事を確認してから俺に向き直る。

「俺と香織と君は、何とも不思議な関係なものだね。三人ともそれぞれ欠けていて、それぞれがその互いの欠けたパーツを持っている。考えてみたら素晴らしい関係だとは思わないか？ 互いで補完しあえる」

鈴木薫は、怪訝そうに眉を寄せ此方を見ている。

「おっしゃっている意味が良く分かりません」

俺は、一回大きく息を吸って吐き出して、覚悟を決める。

「君の精子を提供して欲しい」

鈴木薫は目を見開き此方を見るけれど何も言わなかった。正確に

は口を開きかけたが、彼女なりに俺とのやり取りで学んだのか、話を取りあえず最後まで聞く事にしたようだ。

「勿論、君に迷惑はかけない。生まれてきた子供は俺と香織の実子として育てる。君は、俺として診察を受け精子を提供して、後は何くわぬ顔で過ごしてくれば良い」

勿論コレは法的には色々問題はある。夫婦で同意であれば精子提供による出産で生まれた事も嫡出子として迎えることは出来る事は出来る。でもそうするとその旨が記録として残るし、今の時代の流れから子供にもその事を伝える義務が起こってくる。また香織の中に誰だか分からない人物の匿名の精子を受け入れさせるというのに戸惑いもあった。欲しいのは誰の目からみても俺と香織とされる子供。それにはコレしかない。鈴木薫は何やら、ジツと考えているようだ。

「香織ちゃんが、こんな方法を承諾するとは思えませんが」

俺も緊張していたからこの時に、頭の良い鈴木薫なら当然してくると思われていた質問を抜かしてきた事に気が付かなかった。俺は顔を横にふる。

「関係ない、香織にも秘密に事を進める。俺と君との間だけの秘密だ。人口受精は夫婦で一緒に作業行ふ必要ないからな」

鈴木薫の表情が、俺を憐れむように歪む。そして彼女は俺を無残に絶望へと追い込む一言を口にした。

「それは無理よ！ 香織ちゃん是不妊の本当の原因に気付いている。だから、妊娠が発覚した段階でオカシイと気が付きますよ」

その言葉が意味する内容が、最初頭に入ってこなかった。鈴木薫がハツとした顔になり慌てて口に手をやるのを見ている内に、理解していく。鈴木薫がその後何か言っているようだが、何も聞こえない。グワングワンという鈍い音が当たり頭の中で響き、視界が歪む。気遣うように近づき鈴木薫乱暴に押しのけ叫ぶ。

崩れていく風景（後書き）

人工授精における、法的な戸籍の扱いというのは私自身は法律の専門家であるわけではないですし、物語の展開を重視している事もあり、あえて間違えて書いている部分もある事はご了承下さい。

良き友情の形

友情というのは不思議なものである。大体において、気の合う人、趣味が合う、価値観が合う、話しが合うだから友達になる。そういうものではあるものの、一番大切なのはそこにいることが心地よいかという問題になる。

その心地良さというのは、なかなかのくせ者で、話が面白い、相手の気性が優しいという他に、自分を傷つけない、コンプレックスを刺激しない、一緒にいる事で得する、自尊心が満足出来るという事も含まれる。なので相手がいくら素晴らしい人格の持ち主で容姿もよくお金ももっていて気前が良いという相手であっても、その恩恵をつける事に満足出来ていいるうちにはいいが、その相手がもっていて自分が持つてないものを意識しだすと嫌になってしまふ事もありあえる。

香織は、可愛らしいし、最高のパートナーをもち、まさに理想の幸せな姿を体現したような女性である。G I Dを意識してからかなりひがみつばくなってきた私からしてみたら、まさにコンプレックスを刺激されまくるはずの相手。でも何故私は二人を嫌にならずに寧ろ慕って付き合ってたのか？ それは二人が私と同様に痛みをもった人間だからだ。そしてその痛み部分が、私の抱える痛みと微妙にズレている所も良かったのだ。あまりにも同じだと、それはそれでコンプレックスを刺激して辛いものがある。その点その欠けている部分のズレの位置が絶妙で、互いに支え合えるよい関係。

しかし、賢治にとって自分ってどれ程、苦々しい存在だったのかというのを今さらのように気が付かされた。賢治がまさかその事に気が付いているとは思っていなかったから。

私は、呆然と去って行く鈴木賢治の車を見つめるしか出来ない。動揺していたとはいえ、最悪な事を仕出かしてしまった。慌ててタクシーを拾い二人のマンションがある町名を指示する。

チヨット考えてみたら分かるどころ事だった。何故、賢治が私に對してあそこまで毛嫌いしてきていたのか？ 私の進もうとしている道が、どれ程賢治にとって不快なものだったのか？ 彼が喉から手が出るほど欲しいものを、私は目的の為に捨てようとしているのだ。別に私もそれを簡単な気持ちで捨てようとしているわけではない。悩んで苦しんだ上での決断である。だからといって、それが賢治にとって暖かく見守れる物ではないだろう。

そんな事も気が付かず散々甘え、私は散々彼の隣で彼の感情を逆撫でするような悩みを吐露して、苦しみ続けたのだ。

そう二人の抱える問題を知った上で、私はソコに心地よさを覚えていた。自分が求める理想の夫婦でありながら、子供を作れず求めている幸せを手に入れない。それは女性になることを羨望しながら、完全に女性になれない私に通じる痛みを知る相手という意味と、同時にどこかその相手がもつ痛みが私のコンプレックスを絶妙に刺激せずに自尊心を満足させるモノだったから。

逆にまったく同じような悩みを抱える、G I Dとの関係はどこか傷の舐めあいになり、時々痛すぎて辛くなる。だけどここの夫婦だとその傷の位置が微妙に違うことで上手くいつていたのだと思い込んでいた。

『お前がソレを、捨てるというなら、よこせ！』　そう思つて当然である。

頭の中でこの後起こりうる悪い事ばかりが浮かびさらに怖くなる。

賢治の電話番号なんて最初から知らない。たしか名刺はもらったことあるけれど、あれは仕事用のものだから今かけても繋がらないだろう。それに車の運転をしている最中であろう相手にかけるというのも怖いものがある。香織ちゃんに電話しようとするが何と告げれば良いのかわからず戸惑ってしまい、ただスマホを握りしめてジッと見つめる。内にマンションにたどり付く。私はお釣りも受け取らず、タクシーを降り、マンションに入る。恐々と部屋番号を押すと、穏やかな香織の声が返ってきて少しホッとする。

こんな遅くにいきなり訪ねてきた私を香織は、驚きながらも部屋に招き入れてくれた。

部屋に入ってみると、温かみのある暖色系の明かりに満ちた、いつもと変わらない安らぎの空間が広がっている。香織は私の訪問が、また私の身に何かが起こったのだとは思ったようで心配そうにコチラを見つめている。

「賢治さんは」

キョロキョロと部屋を見渡し聞いてみる。私が一番この時、気になっていたモノがない。

「ケンちゃん相談したい事あったの？ さっき帰るって電話があったから、もう帰ってくるわよ」

「電話？ いつ頃？」

余裕もなく、切羽詰まった感じで聞いてしまう私を、香織はビツクリした感じで見つめている。

「十分ほど前だけど」

『十分程前』ということは、私と別れた後の事。取りあえず、賢治が無事である事が分かり胸をなで下ろす。

「薫ちゃん、どうしたの？ 何かあった？」

心配そうに聞いてくる香織に、どう返事を返すか悩む。今の自分かなり怪しい行動をしているのを自覚はしている。でも私がやこしい事態を引き起こしているとはいえ、私がまた此所で夫婦の問題に口出ししていいものでもない。

「いや、あの賢治さん、最近忙しいのよね？ 電話でどんな感じだった？」

とりあえず、当たり障りのない感じで探ってみる。香織は『ウン』と首をかしげ答えようとした所で、玄関の方から音がする。

「ただいま、香織」

賢治が、先程までの表情が嘘のように柔らかい笑顔でリビングに入ってくる。しかしその表情が香織の横に立つ私の姿を見て急変する。

「貴様、此所でなにやっている！」

うなるような低い声で賢治がそう言いながら、ズンズン近づいてきて、乱暴に私の腕を掴む。そのまま引きずられるように違う部屋に連れていかれ、壁へと突き飛ばされる。

背中に衝撃がおきガシャンと何かが壊れる音がする。痛む背中を気にする余裕もなく、私が鬼のような形相でコチラに迫る賢治を防

御の姿勢で見つめ返すしかできなかった。

裏路地の風景

人生において、ここまで自分を失う程動揺したという事は初めてなのかもしれない。俺は目の前にいる相手を怒鳴りちらし、車から無理矢理降ろさせる。せめてそうしたのは、俺の中に僅かばかりに残った理性によるものだったのかもしれない。これ以上顔を合わせていたら、鈴木薫に何をしていたか分からなかった。俺は車を降りて呆然としている鈴木薫の視線を感じながら、そのまま車を発進させる。そして姿が見えなくなったあたりで、路地に車をすべらせ止めてそのまま、抑えきれなかった感情をはき出すように言葉にならない声をあげハンドルに俯しそのままジツとする。

結婚生活当初は、子作りといった事も気にせず思っ存分愛し合っていた。寧ろ子供が生まれてしまったら、こういった甘い時間とにくくなるだろうと、その二人っきりの時間を楽しんでた。二年目を超えたあたりから香織は基礎体温を付け始め、排卵期にはより張り切って子作りをするようになる。そして三年目から香織は産婦人科を頼るようになる。そして医師の指導の下に、排卵を確認した上で性行為を行うというなんとも空疎な状況を繰り返す事になる。子供を作るために必死になってしまっている香織を宥めながら、裏で俺は自分も泌尿科に検査へといく。一人で香織を悩ませないためにも俺なりに一緒に頑張るつもりの行動だった。しかしそこで俺は衝撃的な診断をつける。

『精子無力症』

喫煙が原因なのか？ それとも大学時代にかかってしまったおたふく風邪が原因なのか？ 仕事のストレス？ 女性不妊に比べ男性不妊は原因が不明な部分が多く、煙草も止め漢方薬治療などをおこ

なつてみたが改善がまったく見られなく俺は絶望する。そしてその事実を香織に伝えることすらも怖くて出来なかった。

香織が最も求めている夢を、壊しているのが俺自身だと何故言える？ 苦しんでいる香織に『ストレスを溜めるのはよくない』のんびりいこう』といった言葉をかけ、抱きしめるしか出来なかった。香織の前では完璧な頼れる男でいたかった。実質はどうであれ、彼女の前ではヒーローでありたかった。

しかし、鈴木薫は、こう言った。『香織は不妊の原因を知っている』と、そしてあの提案をした時、鈴木薫は『俺と香織で人工授精を何故しないのか？』とは聞いてこなかった。

クククククク

その二つの事が意味する事に俺は、笑うしかない。一人で暗い路地で不気味に笑う俺は、端からみたらかなり異様な状況だったと思うが、そんな事も気にする余裕すら、今の俺にはない。

冷静に考えてみたら、香織が気付いて当然のこと。病院の検査に香織には何の問題も無い事は分かっている。となると残される可能性を考えてみたら分かるものかもしれない。

しかし、香織は何故俺に何も言っただけでよかった？ それは俺のプライドを壊さない為。二人とも気付いていながら、互いにその事に気付いていない演技を続けていた。

どうすれば良い？ 俺は。香織はまだ二十八歳。これから別の相手と結婚すれば、彼女が求める子供のいる家族というものを作り出すことが出来る。しかし俺は香織を今更手放したくなんてない。俺には香織がいないと駄目なのだ。

香織には自分がいないと駄目なんだ。そう思い続けていたが、実は逆。守るつもりが、俺がずっと守られていた。

とんだヒーローだ。何が自慢の旦那様だ。

『欲しいモノ全てを手に入れられるなんて甘い事考えていませんので』

鈴木薫が先程言っていた言葉を思い出す。俺も全てを手にいれるなんて考えていたわけではない。ただ、何に変えてもコレだけは叶えてやると思っていた夢を、自分が原因で叶わないという事実をどう受け入れたらいいというのだろうか？

しばらく、ハンドルに凭れ俯したままの格好でどれほどいたのだろうか？ 目の端に車のキーについたキーホルダが見える。香織がクリスマスにプレゼントしてくれた、イタリアのデザイナーが作ったというシャープな犬のデザインのモノ。互いに好みを知り尽くしているだけに、確実に俺の喜ぶモノを香織は与えてくれる。疲れているときには、胃に優しくて元気が出るものを、甘えたいときには優しさを。

俺は大きく深呼吸してバックミラーに映る自分の顔を見る。やや髪の毛の乱れた俺の姿がそこにある。俺は手櫛でその乱れを直し、もう一度深呼吸をする。

（もう、大丈夫、落ち着いた。 帰ろう！ 家に。 愛しい我が家に）

そして、家で待っている香織に帰るコールをする。穏やかに電話をかける香織の声にホツとする。そこにはいつもと同じ日常がある。ギアをドライブに戻し車を発進させた。

いつものようにリモコンで駐車場のシャッターを開け、車を内部

に入れ自分の駐車スペースに車を滑らせる。そしていつものように駐車場のエレベーターから自分の住む階へと向かい、廊下を歩き、鍵を開け『ただいま』いつものように挨拶をして部屋に入る。

リビングでは、香織がいつものように微笑んで俺を迎えてくれた、鈴木薫の隣で。俺はその瞬間にせつかく抑えてきた先程の感情が吹き上がってくる。すぐに鈴木薫の手をつかみそのまま寝室に連れ込み荒く突き飛ばす。鈴木薫は引きずられるように移動させられた事もあり体勢が整ってなかったので、激しく壁に背中をぶつける。

俺は後ろ手で鍵を閉め、鈴木薫に詰め寄る。胸ぐらを掴んで揺さぶる俺を、鈴木薫は必死で俺の胸に手を伸ばし抵抗する。

「貴様、何しにここにきた！」

「あ、あんたの事が心配できたの！」

鈴木薫は俺に気圧された様子でそう叫ぶ。こんな子供にまで心配されているとは、と余計に苛立ちが増す。

「はっ、心配！ 偉くなったものだ。しかし俺達夫婦の問題に、お前は関係ない介入してくるな！」

その言葉に、鈴木薫の顔がキツと俺を見上げる。

「こつちだって、介入する気も、邪魔する気もない！ あんたが勝手に巻き込んでいただけだろ！」

考えてみたら正論ではあるが、俺は思わず彼女の顔を殴る。そのまま鈴木薫は吹き飛び後ろの棚にぶつかり、崩れ落ちる。この攻撃

の所為か、それとも俺の言い分に対してか彼女もむかついてきたのか、ゆっくり立ち上がりコチラを睨んでくる。

「香織に何を言った？」

鈴木薫はフンと笑う。

「何も」

「本当か！？」

俺は、疑うようにゆっくりと彼女に近づき低い声でもう意一度聞く。彼女が口を開いた瞬間に俺は、肩を叩かれ後ろを向く。その瞬間に頬の激しい痛みを感じた。香織がキツイ視線コチラを真っ直ぐ見上げ、立っていた。香織に俺はひっぱたかれたという事実が気が付く。

合わないピースの形と足りないピースの形

私は少し前まで男性として生きてきたものの、人と取っ組み合いの喧嘩なんてした事がない。基本にお坊ちゃまとして育っていた事もあるけれど、何故か女性として生きている時の方がこんな状況にばかり陥っているのだろうか？

最初こそは、常気を逸した目でコチラに向かってきて暴行と暴言を吐いてくる賢治にビビって自分を守る事が必死だったが、相手のテンションがうつってくるものなのか、単に不条理過ぎる言い分だんだん頭にくるようになったのか、気が付けば怒鳴り返していた。そんな時に目の端で何かが動くのを感じる。その人物は二人の間に割り込んでくるように入ってくる。

パシッ

突然部屋の中にそんな鋭い音がする。チョット前までの喧噪が嘘のようにシンとなる。

あれ程激昂していた賢治も、香織にひっぱたかれ一気にトーンダウンした。賢治は鍵をかけたものの、その扉の鍵なんてコイン一つで開けることができるので、リビングへの扉は開け放たれていた。

「ケンちゃん、何しているの！」

香織は二人の間に立ち、私を守るように立ち静かにそう賢治を叱った。背もむけているから分らないが、その声は凜とした響きがあり大声ではないものの香織の怒りの感情を感じる。

何かに取り憑かれていたような賢治の目の目に、人間らしい感情が戻る。

「あ、香織。ゴメン」

賢治は、ひっぱたいた香織の手を気にし、その手を心配そうに持ちながらそう謝る。本来なら、『謝る相手と気にするところそこか！』と私はツツコム所だけど、実際こういう状況の時って何もいえない。

「謝る相手が違うでしょう」

香織が冷静に、賢治に指摘してくれた。そしてふりむき私を見て、申し訳なさそうに眉を顰める。棚にぶつかったときに壊れたガラスの置物で手を切っていたようで、気が付くと血が流れていた。そして頬がズキズキと痛む。賢治の顔をみると見事なほど、真っ赤に香織の手形がついている。それはそれで痛そうに見えた。

「薫ちゃん大丈夫？ ごめんね、怪我してるね。血まで……」

私は香織が謝ることでもないのので、首を横にふる。香織は大きく溜息をつき、キッ後ろを振り向く。

「薫ちゃんの手当は、ケンちゃんがしなさい！ 話はその後で聞きます！ 薫ちゃん、こっちに冷やすモノもってくるから」

私の手を優しく取り、私をリビングへと導く。賢治は大人しくその後についてくる。何も言葉を発しないところが、少し心配になる。香織は私をソファーに座らせ、台所へといく。賢治は救急箱をどこからかもってきて私の隣に座る。

「申し訳なかった」

この男らしくない小さい声が聞こえる。見上げると、賢治は真っ直ぐ私の顔をみて真剣な表情でコチラを見ていた。

「思わずキレてしまつて、とんでもない事をした。本当に申し訳ない」

今度はハッキリとした口調で頭を下げ謝ってくる。理不尽な事をされたものの、元々賢治自身に対しての怒りというのは元々なかったので、私は首を横にふる。

「いえ、私も考えなしでしたので、貴方に不快な思いをさせて、ゴメンナサイ」

賢治はその言葉に顔を苦痛に歪ませる。しかし何も言葉を返さずに、私の手の手当を始める。香織がアイスノンをもってきて、私に手渡し頬を冷やすように指示をする。賢治の頬もかなり痛そうなので、ソチラも冷やしたほうがとも思うものの、香織は賢治をチラリとみつめ、再びキツチンに戻っていく。

長い男らしい指をもつ手が、器用に私の手の傷を消毒しガーゼを当て包帯を巻いていくのを私はただ静かに見ていた。

「縫う必要はないと思うけれど、痛みがひどいようなら病院に行つて下さい。もちろんその治療費はお支払いいたしますので、他に痛むところはありませんか」

若干背中とかも痛かったが、私は首を横に振った。そして自分の頬にあてていたアイスノンを賢治に渡す。賢治はキョトンとそれを見る。

「いえ、貴方の方も冷やしたほうがいいかと思って。商売柄頬腫らせていくわけにもいきませんよね？」

その言葉に、賢治がフツと笑う。久しぶりにみる作ってない笑みに感じた。そして私の手ごとをもってそのアイスノンを私の頬に戻す。コトつと音がして、テーブルの上に香織の良いお茶が三つ置かれる。

香織はそのままトレイをテーブルの下の置き、ソファーに座り私達に向き合う。

「二人とも、何があったのか、話してもらえるわよね」

香織は、そう切り出してきた。私はどう答えるべきか分からず、賢治の顔をチラリと見る。賢治は一瞬だけ私の顔を見たが、その後は香織の顔だけを見つめる。そして小さく溜息をつき、事の顛末を淡々とした口調で語り出す。感情とか一切入ってない状況を説明していく。そこに彼の苦悩の深さを逆に感じる。

香織を、その内容をジツと聞きながらだんだんと表情を青ざめさせていく。そして口を抑え小さく呻き声をあげる。しかし俯くことはせずに話しをする賢治の姿を見つめ続ける。賢治も話している間、香織から目をまったく逸らすこともなく、二人はここに私がいる事も忘れてるように見つめ合っている。

賢治が話し終えても、二人は黙って視線を合わせたまま。これが夫婦というもののなのだろうか、強すぎる想いで繋がっている二人の姿を見せつけられる。

「香織」

賢治の呼びかけに、香織がビクッと動き、その瞳から涙がスツと

こぼれる。静かに賢治が立ち上がり香織に近づき横に座り抱きしめる。

「ケンちゃん……私は貴方を……ずっと追い詰めていたのね」

賢治は首を横にふる。

「違う！ 香織。俺は君と最高の家族を作りたかったただけだ」

香織はその言葉に痛みそうな顔をする。

「私は、家族が欲しいから、貴方と結婚したわけではない。子供が欲しいから結婚したわけでもない」

（貴方が好きだから結婚した。だから貴方の子供が欲しかった）

そういう香織の心の声を私は感じる。

香織は手をそつと賢治の赤い頬に当てて、なだめるように、子供に言い聞かせるような口調で賢治に語る。

「貴方と一緒に生きたいと思ったから……二人でいることが家族ではないの？」

「分かっている……しかし」

香織の言葉を遮るように賢治は言葉を発する。いつになく必死な様子だ。

私はというと、勝手に帰るわけにもいかず、かといって言葉をかける訳にもいかず、ただ息を殺しその二人の会話を聞いている。

同時に私達三人の関係と、賢治が提案してきた事について考える。

精子を持たない賢治、満たされない空っぽの子宮を持つ香織、子宮を持たず精子をもつ私。私は子宮を持つ香織がどうしてもなく羨ましく、賢治は自分には持てなかった生殖能力を捨てようとしている私に激しい妬心を抱く。香織はポツカリとした心と子宮を抱え耐えているだけ。

「君は馬鹿な事というけれど、この方法ならば、俺達は皆欲しいモノを手に入れることができる。俺の為に君が子供を諦めるというのが許せないんだ！」

欲しいモノ。恐らくは賢治が最もソレを欲していて、香織が慟哭の未諦め、私はあえて考える事も放棄し見ないようにしたモノ。それを賢治は三人で力を合わせれば手に入ると力説する。ようやく会話は、私を含めた三人の話題になるものの、私はその会話に迂闊に口を挟めず、ただ二人の顔を交互に見つめるしかできない。

「でも、そうすることで、薫ちゃんにもリスクを負わせるなんて出来ない」

香織は、そう言い気遣うように私をチラリと見る。

私の戸籍には絶対に、父親として子供の存在は記せない。そうなると女性になる道が閉ざされる。（現在では子供が成人した段階で戸籍の性別変更は可能）

しかし賢治は首をふり、私を縋るように見て、香織に視線を戻し必死な表情で訴えるように肩を持つ。

「薫さんも俺も血液型は同じA B型だ。しかも君のお母さんによく似ている。だから皆誰も怪しまない。俺達だけでない。高梨さんも俺の両親までも幸せに出来る。それに薫さん！君も、ソレで思い残す事もなく前に進めるのではないか？君も諦めることはなく全

てを手にいれられる」

狡い言い方である。確かに、生殖能力を失う前に子供を作る事が出来るのは堪らない魅力である、自分のDNAを持つ存在を生み出せる。しかしそれは誰にも明かす事は出来ず、大きな秘密を一つ抱えていくことになる。

同時に、三人だけでなく子供を何よりも心待ちにしている存在をちらつかせてきている。

そこを突かれると、香織も何も言い返せないだろう。結婚というものとは二人だけの問題ではない。『二人で生きていく、貴方だけがいればいい』そう言い張って生きていけるものでもない。賢治の両親も、香織との会話の口ぶりから孫を何よりも心待ちにしているようだ。息子の実情を知らずに……。

私の心が激しく揺れる。逃げる事は簡単である。しかし私だけの問題でないだけに私を迷わせる。倫理的観点で、法律的観点で考えると結論は簡単ではあるけれど、ソレで割り切れるならば人間は苦勞しない。賢治必死な視線を浴びながら、私と香織は顔を見合わせ悩む。香織の瞳も私同様激しく揺れ動いているのが分かった。どうすれば私は良いのだろうか？

私は抱えきれない感情や想いで息苦しくなり、大きく深呼吸をする。

未来へ続くピース

梅雨という季節は、何故こうも鬱陶しいのだろうか？ 纏わりついてくる湿気がどうしようもなく私を苛立たせる。

これらの不調はホルモン治療による副作用。更年期障害に似た症状と言われてもピンと来なかったが、実際自分になってみると確かにこれは情緒不安定にもなるし、気を抜くと無気力になってしまうのも仕方がないと思う。こういう状態だっただけに、親元で治療を進めている事がありがたかった。

最初の方こそ、胸が出来てきたり、体つきがやや丸くなってきたりと、女性へ変化していく自分というものを感じられて、そこに喜びもあり楽しさもあつたのだが、半年を超えたあたりからそういった目に見える変化もなくなると、単に体調不良だけを感じる日々が私をうんざりさせていた。

そして私を散々ブルーにさせていた朝勃ちが、気が付いたら起こらなくなっていた。同時に私はコレで完全に男ではなくなったという事を認識し、そこにも複雑な気持ちを感じる。

現在私は大学二年生。医者への道は諦め、薬学科に転科しG I Dの治療をしながら薬剤師を目指している。この大学に行ったからには、人の役に立つ仕事をしたいし、折角入り父が残してくれていたこの大学の籍を無駄にするのももったいなかったから。仕事に繋がる資格ということでこの路を選ぶことにした。

勿論薬剤師の資格をとったからと、即それが就職に繋がるのかという、あとは私という人間に掛かっているのは分かる。だから私は自分の出来る事を精一杯なんでもする、それだけである。

私は大学では、G I Dであることを隠さないで通うことにした。ここで乗り越えていけば、社会に出てもやっていけないだろうから。高校時代で、自分を誤魔化して生きるという苦痛を散々味わってきたし、治療を本格的に進めたこともあり、在学中に突然性別が変わるよりも、周りは受け入れやすいだろうと考えたからだ。理性で分かっていても感情がついていかないのか、周りはどう私と扱ってよいのか分からない所があったようで、遠巻きに接してくる。一年たった今では少し慣れてきたのか、挨拶とか会話を普通に出来るようにはなったが、高校時代のようにいつも一緒にいるというような友達はいなかった。しかしハツキリした人生の目的があることと、現在進行で変化していく自分自身との向き合う事もあり、寂しさは感じなかった。

ボウツとした思考を自分で叱咤しながら講義を受けていると、私のスマホが震え着信を伝える。そつと画面を見てみると『鈴木賢治』とある。私はメール画面を開いて、その内容を見て立ち上がる。啞然としている教授や教室の皆に、体調が悪いとだけ継げ、教室を飛び出した。

『今、連絡があった。』

香織が午前中病院に入ったようだ。

俺は今打ち合わせ中ですのですぐに動けない。

頼む、先にいつて見守ってくれ』

私は駅前に走り、タクシーに乗り込み、病院名を伝える。乗っている間に身体が震えてくる。脳天気には話しかけてくる運転手さんの言葉がまともにはいらず、私は曖昧な言葉だけを返す。あえて最悪な事を考えないようにしているために、思考が失われ頭が真っ白になっていく。

病院に到着すると、私はお金を払い運転手が扉を開ける前に自分

で開けて、院内に飛び込む。そして受け付けで場所を確認しエレベーターを待つ時間も惜しくて階段を駆け上がる。

本来だったら、自分には絶対関わりもないであろうその場所は、不思議な活気と緊迫感に満ちていた。

「あら、薫ちゃん？ 久しぶりね。来てくれて嬉しいわ！ 薫ちゃんがいれば、香織も頼もしいでしょうね」

何回か会った事のある、香織の祖母である高梨さんがニッコリとコチラに笑いかけてくる。

「香織ちゃん？ 賢治さんから連絡もらって！」

余裕もなく、高梨さんに挨拶も忘れ話しかける私に、彼女は香織によく似た上品な感じでクスクスと笑う。

「まだ分娩室よ。そんな心配しなくても大丈夫よ。コチラに座って、何か飲んで落ち着きましょうか」

そういつて私を、待合室の椅子に座らせてくれた。そして前に座っている、賢治の両親であろう二人に私を紹介してくれた。賢治によく似たダンディーな感じの中年男性と、仕事をバリバリしてきたキヤリアウーマンという感じの女性。二人も高梨さんと同じように、明るく私を迎えてくれた。三人の顔には不安よりも、今か今かと生まれてくる子供を待っているという喜びの感情の方が強いようだ。お母さんは、有名な子供服のブランドの大きめの袋を下げてきている。病院にそんなに洋服もってきて、とても着せられきれないだろうという感じだけど、孫にあげたくてたまらないのだろう。

「あの、香織ちゃん本当に大丈夫なのでしょうか？ 予定よりこんなに早く。しかももうお昼なのにまだ……」

子供を実際に産んできた女性だからだろうか？ 二人は不思議な程落ち着いている。予定では一週間後に入院して、計画無痛分娩を行うという事だった。もう誕生日も決まっっていて六月の三週目の土曜日に生まれてくるはず。しかしそれよりも一週間も早く破水が起こり病院に入ることになったのだ。

「初産の場合は、予定から狂うことも多いのよ。それに時間もかかるものなの。それにあの子は強い子だから大丈夫よ、薫さんそんな顔をしないで」

高梨さんの言葉で私は少し落ち着きを取り戻す。私と同じように賢治が髪の毛を振り乱して待合室にやってくるのが見えた。まだ生まれてない事に驚きながら、受け付けへと向かう。スーツの荷物と上着を親に預け、私の方を見て頷きながら中に入っていた。夫である彼は立ち会うつもりなのだろう。子供を産まれてくる瞬間から見守るつもりなのだ。その表情は、ただ動揺している私とは異なり、全てを受け入れる覚悟を決めた男の顔になっている。私に出来る事は、少し離れた所で二人の事を、いや三人の事を祈るだけだ。

私達は期間を限定してチャレンジをするという事を話し合って決めた。人工授精の成功率というのは実は十%で高くない。半分は運命に委ね、三回だけ行い、その結果を三人で受け入れるという事にした。一回目のチャレンジは失敗した。生理が来たことで、失意に沈みながらも賢治や私に明るく振る舞う香織が痛々しかった。このチャレンジ実が一番、香織の精神的負担が大きい。賢治はと私は見守るしか出来ないという事で、男というモノがこういう状況ではまったく役に立たないという事を思い知らされた。私は食事にいつも

以上気を遣い、残りのチャレンジに挑む事になった。二回目を失敗し、より苦悩の色を深める賢治と、小さい身体でジツと耐えるような覚悟を決めている香織に私は何も言えなかった。内心この話に乗ってしまった事を激しく後悔していた。

そして三回目に香織は妊娠し、私はそこで力が抜けるような安堵感に包まれた。

しかし私自身はその段階で無邪気に喜んだ自分が恥ずかしくなる。まだまだ妊娠は、スタートでしかない。彼女の中で、私と香織との子供が大きくなっていく。香織の月齢が進むにつれ顔つき体つきが変化していく、そして子供の成長とともに彼女は母親へと変化していく。コレが本当の女なのだというのを改めて見せつけられる。同時にホルモン剤治療を始めた私の身体も男から少しずつ女になっていく時期と丁度同時期だっただけに、私はそこに不思議なシンクロを感じていた。

二人の変化は、周りにも影響を与えていく。私の両親も後戻りも出来ない事で腹をくくったというのもあるのか娘と受け入れてくれるようになっていった。薄着で家の中を歩いていると父は、はしたないと注意するようになり、母は自分で私の為に女物の服を買ってきてくれるようになった。

賢治も男から父親へとこの十ヶ月で成長を一緒にしていったように感じる。以前感じたような不安定さとか危うさといったものは、もうない。未来を真っ直ぐ見据え、ますます男らしさを感じるようになった。妻への偏愛ぶりは相変わらずだけれど、その対象がお腹の中にいる子供までと範囲を広げていたようだ。あれだけやり合ったのが良かったのか私との関係も、良好でなんとも不思議な友情を築いている。前は香織と二人で楽しんでいた事を三人で行うようになったという感じ。友達というより一人っ子三人集まって、兄妹ゴツコをしている状態なのかもしれない。

産声が聞こえる度に立ち上がり、それが別の子供の声だと知り落胆といった事を、数回繰り返し、待合室で一緒に待っていた三人の表情にも疲労と焦りの表情がよぎりはじめたときに、一際大きい声が聞こえる。もう分娩室にいるのは香織だけの筈なので、私はその声を聞き身体中の力が抜け放心する。

香織の祖母と賢治の両親はすぐに立ち上がり、状況の確認に動くところが流石に年の功ともいうべきなのだろうか？

母子ともに健康で、標準よりも若干小さい女の子が生まれた事を看護婦さんは伝えてくれた。私はようやく安堵の気持ちになることが出来た。

生まれてきたとはいえ、その後色々処置があるようで、それから少し待たされて私達は病室に案内されることになった。母子同室というシステムをとっているようで、母親用の隣に子供用の小さな力ート式のベッドが置かれている。ベッドに横になっている香織は出産の疲労と体力の消耗でやや顔色が悪く曇れたようにも見えたが、その表情は何故だろうか。いつもより神々しく美しく見えた。私の顔をみて彼女はフワリと聖母のような表情で笑う。

そんな隣で賢治がぎこちない仕草で小さい包みを抱きしめている。彼の目が少し赤い所を見ると、子供の誕生に嬉しくて泣いたのだろう。そして私を見て頷く。私は二人に、おめでとうの気持ちをこめて笑いかける。三人だけで視線で秘密の会話をする。

パワー全開で喜びはしゃいでいる高梨さんと賢治の両親に圧され、私はそつと後ろから子供の様子を伺う。

赤ちゃんは本当に信じられない程小さく、そしてしわくちゃで真っ赤な顔で、猿に近い顔をしていたものの、その存在はとてつみな

く可愛らしく愛しく感じた。頬に何かが流れる。もちろんソレは涙なのは分かっているものの、その涙の意味が私には分からなかった。無事に生まれてきた生命に対してなのか？ 事故もなく元気に出産を終えた香織に対してなのか？ 母性本能からくる喜びなのか？ 父性本能からくる喜びなのか？

「薫さんも抱いてみて！」

賢治はふと泣いている私に気が付き、そつと近づき、見舞いに駆けつけた誰よりも先に私にその赤ちゃんを抱かせてくれた。実際抱いてみると、ビックリするくらい小さくて脆い存在に思えて抱いているがなんか怖い。でも抱きしめている事で、何とも言えない幸福感が沸いてくる。私はしばらくその存在を見つめ続ける。

涙が止まらずに子供の頬を私の涙が濡らす。近くにいた高梨さんに、抱いていた子供を預け、涙を拭くために一旦病室を後にする。

お手洗いにいき、トイレットペーパーで鼻を思いつきりかぎ、洗面所で一回顔をぬらし、そつとペーパータオルでそつと抑え、化粧を直す。大きく深呼吸してから、私は病室に戻る事にする。

そつと部屋を覗くと、そこにはなんとも心温まる暖かい、光景が広がっている。

誰よりも愛し合って支え合っている夫婦の間に生まれた赤ちゃん。そしてその誕生を心の底からよ喜び歓迎して迎える祖父母と曾祖母。完璧にも思える家族の風景だった。

私という異物がその景色に加えたピースも、難なく受け入れてビクともしない強さをそこに感じる。

この世界に完璧なんてモノはない。人はそう言う。
私らだけではない、誰もがみんな何だかの『欠け』をもっている。

でもそれは、『欠如』のではなく、何か大切なモノを受け入れるためのスペースなのかもしれない。

賢治と香織は欠けを求め足掻き、そしてその欠けを埋める大切なものを手に入れた。

私は？ 賢治はこの事は皆で欲しいものを手に入れると言った。しかし生まれてきた子供の存在は私にとってかけがえないモノであるものの、私の欠けを埋めるものではない。しかしその存在は私に前へ進む覚悟と勇気を与えてくれる。これから私が足掻いていく為の力を。

「薫さん、薫さん、見て！ 見て！ この子笑っているの！ 眉の動かし方が賢治にそっくり」

賢治の母親が赤ちゃんを抱きながら、部屋に戻ってきた私に笑顔で浮かれた感じで話しかけてくる。

明日の事は明日悩めば良い。今はただこの幸せをみんなで分かち合おう。もう涙も止まった。私も笑いながら、その部屋の中へと足を踏み入れた。

く完く

未来へ続くピース（後書き）

最後までお付き合い頂きましてありがとうございました！

『欠けている』から始まった薫と香織の物語はこの物語は完結いたしました。

如何でしたでしょうか？

このシリーズ、現在『アダプティッドチャイルドは荒野を目指す』にて

メインではないものの鈴木薫の高校時代を描いた物語が現在連載中です。

そちらも楽しんで頂けたら幸いです。

その他に、鈴木薫が社会人になってからの恋愛モノがうつすら頭の中で構想があります。

物語の流れが纏まったら形にしてコチラで連載したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1458q/>

ピースが足りない

2011年11月18日10時36分発行